

第3節 第1トレンチ

古墳時代

暗灰色粘土（遺物包含層）を除去すると、灰茶色粘土をベースとする遺構面が確認され、古墳時代中期の竪穴住居や、柱穴等が検出された。なお遺構から出土する遺物は土師器のみであるが、遺物包含層からは須恵器の蓋坏・甕・窓坏・器台等が確認されている。

S B01

S B01は一辺約5m、深さ約0.3mの良好な状態で確認された。周壁溝は全周しており、土坑がその周壁溝を切る形で存在している。住居内の土器は土坑に入っているものを除いて、全て床面から5~10cm程離れた状態で出土している。またその土器と同じレベルにおいて、滑石製管玉1点とガラス小玉2点、鉄鏃の破片1点が出土している。

また住居内を四分割するような間仕切り溝が見られるが、どの溝も周壁溝より浅い。住居内の主柱穴は4つ確認したが、その内2つには柱材が残っており、長さにして約60cmと良好な状態であった。

土坑は4つあり、その内の2つは（SK03・SK05）は周壁溝を切る場所に存在している。その土坑内からは、小型丸底窓や窓坏等が出土している。また中央やや南寄りの土坑は浅いものの、炭が入っていたことから、炉であろうと思われる。

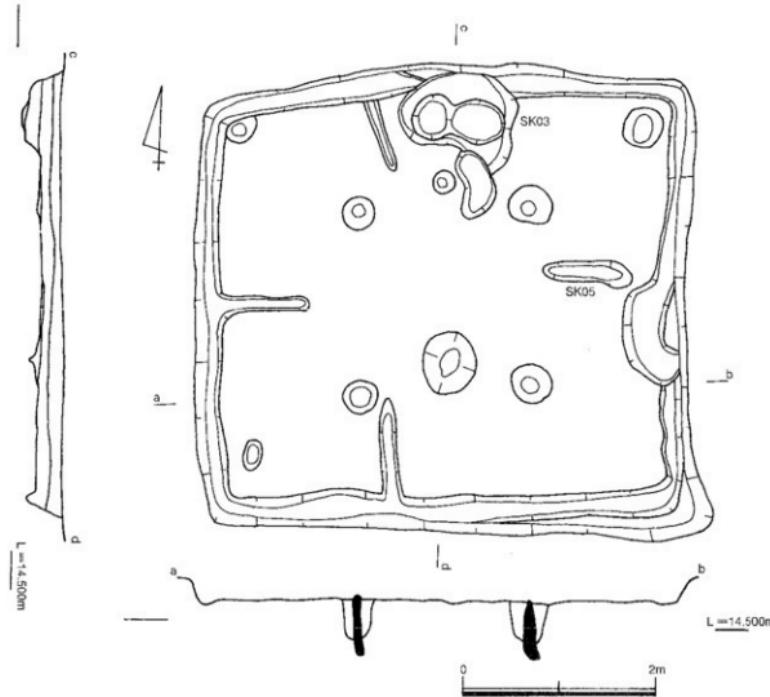


fig.107 第1トレンチS B01平面図・断面図

遺物

住居址内の遺物は土師器がほとんどで、完形品はない。器種は高坏が多く出土しているが、壺・小型丸底壺も出土している。中期初頭の遺物と考えられる。

389は口径12.5cm、高さは16.5cmのやや長胴型の小型品である。外面はタテ及び斜めのハケ調整であり、肩部においても横方向のハケ調整はみられない。内面はナデ調整で、口縁部分のみ横ハケ調整をおこなっている。392はタテハケの後、肩部のみにヨコハケを施した壺である。口径12.5cm、口縁は1/5程度残存している。内面は口縁部分のみにハケを施し、体部はナデ調整であり、接合痕が明瞭である。

小型丸底壺はどちらも粗製のもので、口縁部は短い。390は口径7.1cm、器高7.7cmで、外面は剥離しているが、口縁部分を除いてハケ調整をおこなっている。内面は口縁端部にハケを施し、底部についてナデ調整、胴部についてはケズリをおこなった後ナデ調整で仕上げている。391は外面ハケ調整であるが、内面にケズリは見られず、ナデで仕上げている。

高坏は胎土が粗製のもののみで、脚部に稜をもって屈曲している。脚部は外面にタテ方向のミガキを加えている。内面は中空でケズリをおこない、裾部はナデを施している。スカシ穴はみられない。坏部外面は磨滅により不明の物もあるが、タテ方向にミガキを加えている。393は口径18.4cmで、器高は11.8cmの黄白色を呈す。口縁は1/10程度しか残っていない。ほとんどの高坏が脚部と坏部を別々に成形しているのに対し、394は脚部を作つてから坏部を統けて成形する連続成形のものと考えられる。調整は磨滅のため、不明である。395は住居内の土坑S K05から出土したもので、外面はミガキの前にタテ方向のハケ調整をおこなっている。内面は口縁付近にヨコハケがみられる。

管玉396は淡青灰色を呈し、滑石のものでよく研磨している。ガラス玉は397・398の2点ある。どちらも型作りによるものではなく細長く成形した後切断しており、切断面がやや不整形である。共に淡青色を呈す。

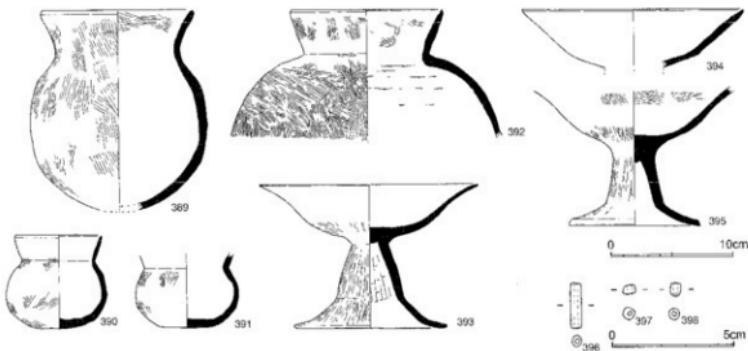


fig. 108 S B01出土遺物実測図

S B02 S B02は掘立柱建物の3間分、4つの柱穴が確認された。東西6m、柱間1.8mで、柱穴の掘り方は直径が30~50cmで、深さ約50cmであった。柱根は残存しておらず、遺物もほとんど出土していないが、S B01と同時期と考えられる。

S X02 S X02は不整形で遺構面から10cm程度下がっている浅い遺構である。埋土は濃灰茶色シルトで、この遺構からは高坏の出土が多くみられた。中でも伏せた状態であった高坏401の坏部は高坏403が重なって出土している。401は外面の磨滅がほとんどなく、また403は磨滅していることから、当初よりこのような状態であったと考えられる。

遺物 S X02出土の土器は高坏がほとんどであり器種としては他に甕・壺がみられた。高坏は口縁に面を有するものと、面をもたずに収めるものがあり、坏部と脚部はいずれも別成形と考えられる。401は外面に横方向のミガキ、内面もミガキ調整をおこなっている。どちらのミガキも隙間なく仕上げられてはいない。403は全体に磨滅し、外面・内面共に調整不明である。スカシ穴はみられない。

壺402は口径11.2cm、高さ5.3cmで、約半分残存していた。外面・内面ともにナデ調整で仕上げており、淡赤橙色を呈す。

自然流路1 調査区の東側は、埋土に礫を含む流路状の遺構が確認され、破片ではあるが土師器・須恵器が含まれていた。この流路は深い場所でも遺構面より約50cm程度しか落ち込んでおらず、水はけも良いことから恒常に水が流れていたものではないと考えられる。

遺物 壺405は口径10.8cmで、口縁は約1/2程度残存していた。外面口縁端部にヨコハケをおこない、内面口縁にもヨコハケがみられる。体部はともにナデ調整である。

壺407は口径12.4cmで、復元器高は13.1cmである。体部外面にタテ方向のハケ調整をおこなうが、ヨコハケはみられない。内面もハケ調整をおこなうが、口縁部分のハケ調整は体部外面のハケより条数が少なく、工具が異なると考えられる。また体部内面にみられるハケは、板状の工具ではなく細長い工具の可能性が考えられる。

壺406は口径12cm、器高4.4cmで鈍い棱を有している。口縁端部は面をもつが、丸くおさめている。

他には高坏等が確認されている。

平安時代 古墳時代の遺構面と同一面で検出されたS K01は、灰色粘質土を埋土にもつ直徑1m、深さ30cmの遺構である。この遺構からは完形の壺404が1点出土している。口径は15.1cm、

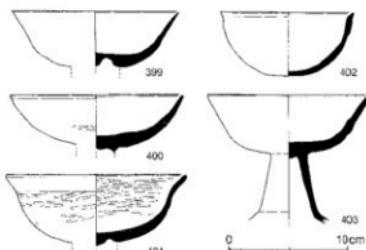


fig.109 S X02出土遺物実測図

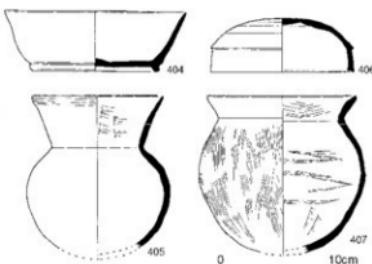


fig.110 自然流路1・SK01出土遺物実測図

高さ5cmで、底部には糊が押しつけられた後があり、糊殻が一部残存していた。底部には仕上げナデが見られる。この坏は白水遺跡内での出土例が少なく、第7次調査区内においても他に同一時期の遺構は検出されていない。

中世

中世の遺構面からは水田址が検出された。畦畔の高さは約5cm程度であり、遺物は遺構上面・畦畔共にほとんど確認されなかった。また調査区の南西では土器をほとんど含まない深さ1m程の自然流路2が確認されている。

(川上・中居)

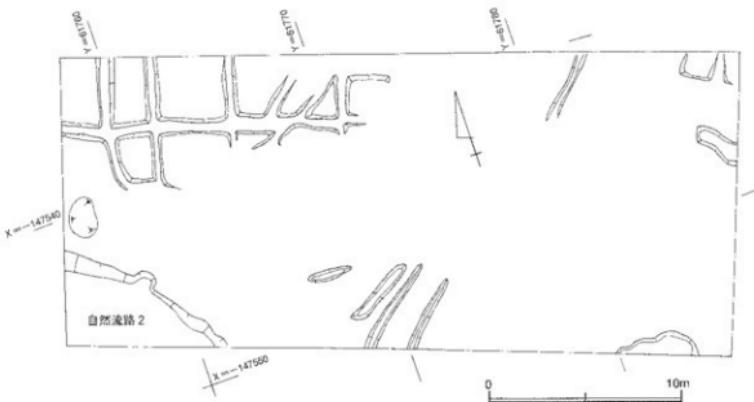


fig.111 第1トレンチ平面図（中世）

第4節 第2トレンチ

第2トレンチは湿地があったため遺構面は調査区内の西側約2/3程度に限られており、1/3は占墳時代・中世ともに遺構面が存在しなかった。

古墳時代

調査区中央では調査区を南北に貫くSD01が確認された。埋土は黒灰色粘土で占墳時代中期の土師器を含んでいる。また柱穴が若干確認されたが、建物を復元するにはいたらなかった。

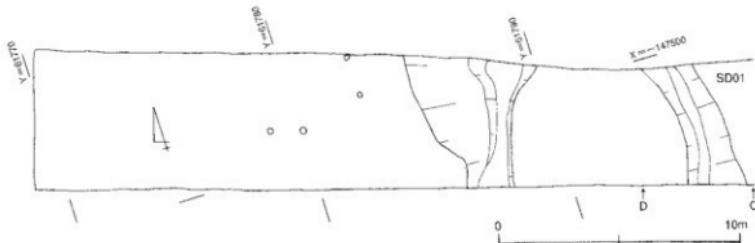


fig.112 第2トレンチ平面図（古墳時代）

遺物

S D01から出土した土器は土師器のみで、器種は壺・小型丸底壺・甕・高坏があるが、いずれも細片であった。小形丸底壺408は頸部から胴部にかけてタテハケ、胴部にはその後ヨコハケを施し底部はナデている。409は口縁を肥厚させた壺で、外面は磨滅のため不明、内面はハケの痕跡が認められる。甕410, 411, 412は外面にタテハケを施し、内面はヨコハケを施している。工具のハケは粗い。

中世

第1造構面は、第1トレンチと同じく水田址が確認できたが、遺存状況は悪かった。遺物はほとんど確認されていない。

(川上・中居)

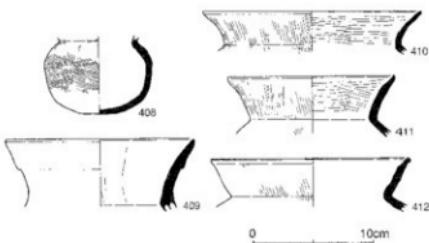


Fig. 113 S D01出土遺物実測図

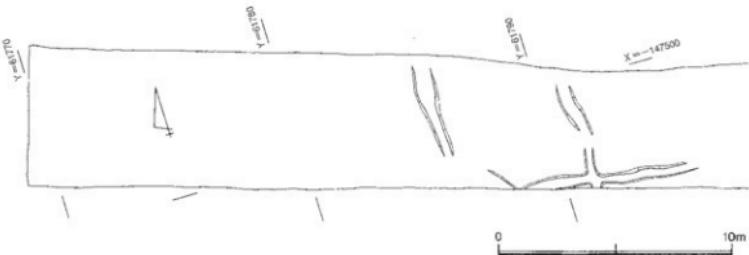
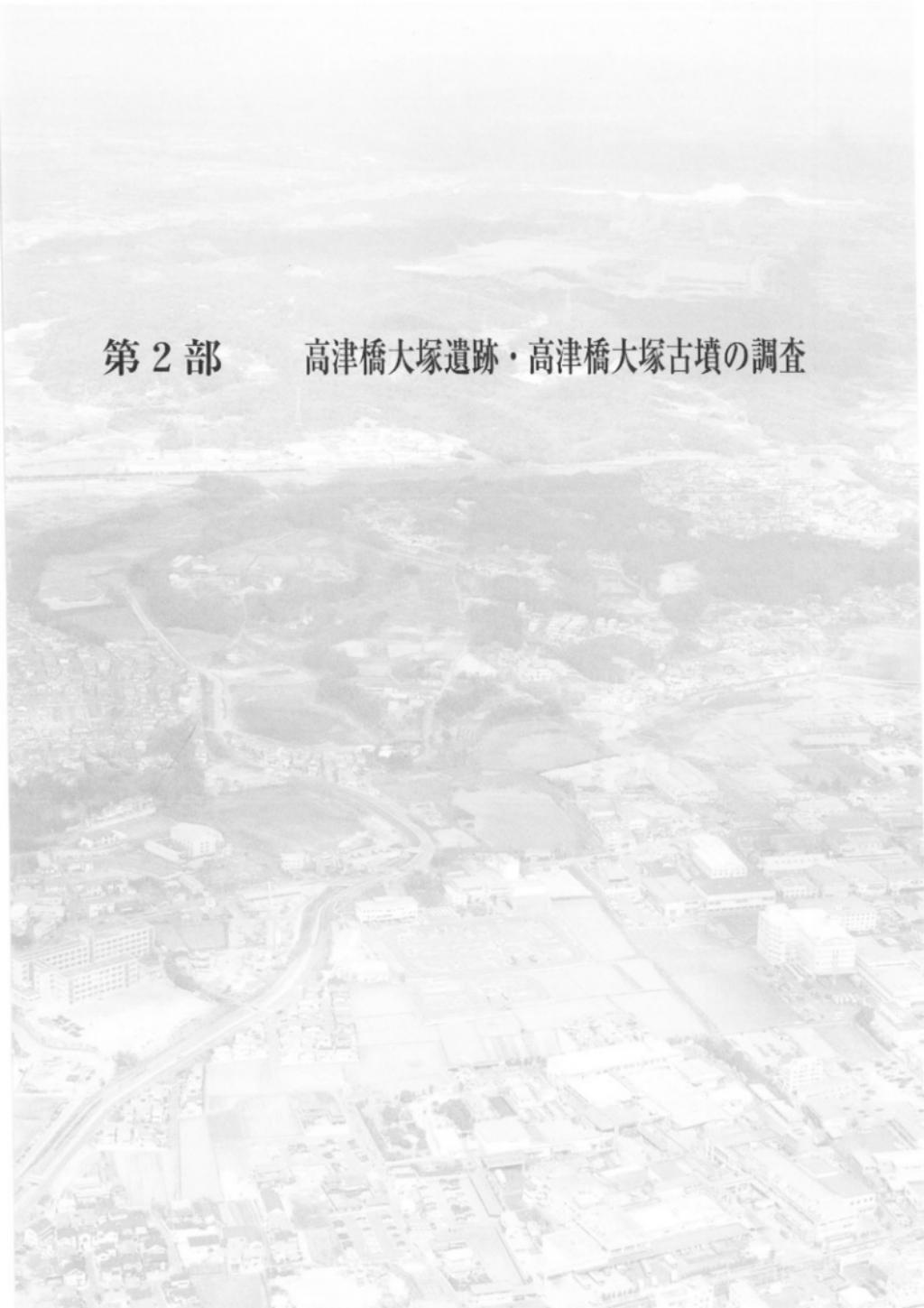


Fig. 114 第2トレンチ平面図(中世)

第5節 小結

平成10年度の調査は、第2トレンチにおいては湿地のため造構面が存在しない場所があり、また自然に形成された流路等が目立った。しかし第1トレンチにおいては、遺物包含層も良好に残っており、鋸歯文の施された初期須恵器の器台が出土している。

第1トレンチのS B01は、須恵器は確認されなかったが、出土した土師器から古墳時代中期前半の時期にあてはまる。また同一面で確認できたその他の造構も住居址と同時期の遺物が出土している。白水遺跡の調査において古墳時代は、T K23型式～T K47型式段階の造構・遺物が多く、それ以前の時期は少ない傾向にあった。明石川流域でみても、この時期の調査例はさほど多くない。のことから今回の調査で確認された住居址は集落の拡大するT K23型式～T K47型式段階に先立つ造構としてとらえることができる。(中居)



第2部 高津橋大塚遺跡・高津橋大塚古墳の調査

第1章 第1次調査の成果（平成7年度）

第1節 B・C地区

(1) 調査の経緯

調査の経緯（はじめに 2. 調査にいたる経緯）の項で略述したが、改めて高津橋大塚遺跡・高津橋大塚古墳の調査経緯を述べる。

区画整理事業に伴い、玉津町高津橋地区については平成7年4月に古墳の確認調査と周辺遺跡の試掘調査を行った。A地区では古墳が、B・C地区では、古墳時代の遺構などが確認された。事業者側との協議を行い、平成7年10月から調査を開始した。

この地区名については、現況計画複合図により区画街路予定地部分と宅地造成部分とを便宜的にA・B・C・D・E地区に区分けして調査をおこなった。このうちA・C・D地区は宅地造成部分、B地区は区画街路、E地区は街路と宅地造成部分である。さらに平成8年2月にはE地区の試掘調査を行い、古墳時代の遺構・遺物が確認された。発掘調査はB・C地区から開始し、遅れてA地区的古墳の調査に入った。

平成8年度は、A地区的調査を継続し、やや遅れてE地区的調査を開始した。そしてA地区的調査完了を見計らってD地区的調査に着手した。



fig.115
高津橋大塚遺跡
調査地位位置図
1:2500

(2) 調査の概要

A地区は地表から高さ約2m程のマウンドが伐採前から観察された。B・C地区は西南方向に緩やかに下がる地形が観察された。D地区はB・C地区から下がった地形から新たに高さ約2m程のマウンドがあるように観察された。

A地区の最も高い所で約36m、B・C地区は最も高い所で約34m、D地区のマウンド状の最も高い所で約30mである。

調査の方法は、現況の雜木を人力および重機により伐採作業を行いこれと並行して人力および重機により表土掘削を実施した。また地区割りについては、A～D地区に基準点測量を行い、これに従って10m方眼の地区を設定した。(fig.116参照)

調査区は標高34m前後の丘陵で、北西から東南に下がる斜面地である。調査区西端部で1m程の段差の崖状地となる。

基本層序

層序は、表土層・黄灰色泥砂（間層）・黄色砂泥（西側斜面部のみ）・黄褐色砂泥（地山）となる。基本的には地山面が造構面となる。G-5～8区の一部は、間層の上面で遺構が検出された。

近現代の 遺構・遺物

間層からは、土師器・須恵器・近現代の遺物が出土した。これらの他に米軍機からのものと思われる銃弾の薬莢がF-6区から⁽¹⁾、また調査区南部を中心に火打ち石片が多く出土した。

調査区南西部では、北西から南東方向に幅0.8m・深さ0.05mの溝状遺構14条（SD04を除くSD02～15、fig122参照）が検出された。

遺構内から泥面子・土人形・陶器・染め付け陶器など近現代の遺物が出土した。

伐採した樹木の樹齢からおそらく戦前まで耕作された畑の跡地と考えられる。SD04は、F-7区で検出された幅1.2m・深さ0.1mの溝状遺構



fig.116 B C地区遺構平面図

で西から東へ流れる。時期は今述べた鶴溝と同じ頃と考えられる。

同じF-7区で9ヵ所のピットが検出された。直径は0.1~0.4mとまちまちであるが深さ0.1m程度の浅いピットである。遺物はないが層位的に近現代のものと考えられる。

D・E-6区でも浅いピットや前述した鶴溝と同じ頃と考えられる浅いSK01~04・SX01~03の遺構が検出された。他にF・G-6区SK06~08・10、F-5区SK09などもまた同時期と考えられる遺構である。

古墳時代の 遺構・遺物

先にも述べたが、間層には近現代と古墳時代の遺物が交じりあう。調査区の東部の斜面には、間層と地山の間に流土層が存在する。この流土層からH-5区東端部で、碧玉製管玉が6点出土した。長さ3.1cm・直径1.0cmのものである。またH-5区では砂岩系の砾石、H-4区では人物埴輪の右肩から腕にかけての破片、家形埴輪片が出土している。

S D01は、D・E-7区で検出された幅1.2m・深さ0.1mの溝状遺構で、ほぼ溝内側で半径約10mの円弧を描く。後世に削平を受けた古墳の周溝である可能性を考えられる。溝より少量の須恵器片が出土した。

SK05

SK05は円弧を描くSD01から外側約1mの近接した個所で検出された、須恵器壺が掘えられた土坑である。直径0.5mで、深さ0.2m程度残存していた。壺は正立せず南方に向いて傾いて検出された。壺は肩部から口縁部は無く肩部の一部と底部が残存していた。残存した肩部の一部は磨耗しており後世の削平時にその一部が表面に露出していたものと考えられる。壺内から同一固体の口縁部片などが少量出土した。掘形内から遺物などは出土しなかった。

SD16

SD16は調査区東南隅で検出された溝状遺構である。東部の斜面の途中から検出され、東側の肩は調査区外である。

図上復元では幅約3.0m・深さ約1.0mの規模を持つ比較的大きな溝である。溝状遺構は南北方向にのびると推定され、SD16の東側に存在する高まりが古墳であれば、当調査区と古墳を画するものであろう。

しかしその後のD地区的調査で、西側は南北に長く段状に落ちる

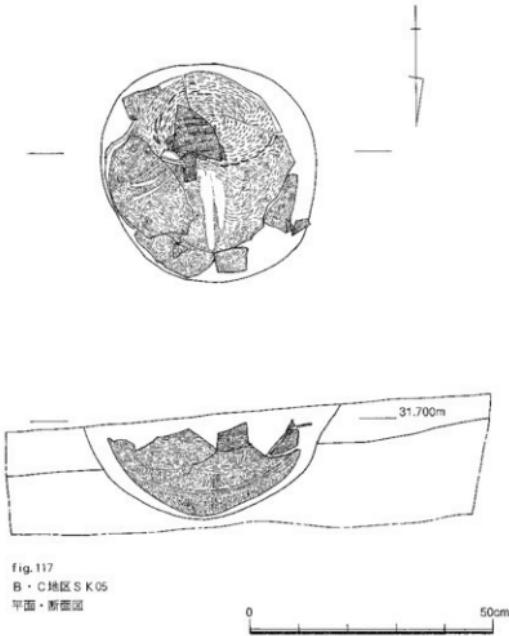


Fig. 117
B・C地区SK05
平面・断面図

が、東側は南北方向に自然に落ちる地形であることが判明した。

遺構から28ℓ入りコンテナに1箱分の埴輪片が出土した。丸い透かしを持つ円筒埴輪片がその大部分を占めるようである。また土師質のものと須恵質のものがあり、その多くは土師質である。

S X04は、F-4区で検出された南北約6.0m・東西約8.0m・深さ0.2mの落ち込み状遺構である。S X04の掘削過程で、S D17が屈曲しながら東へ伸びることが判明した。

S D17は幅1.2m・深さ0.2mの規模で、途中S D18と直角に合流しさらに東へ伸びるが、溝の形状は崩れS K13の付近では、幅2.8m・深さ0.3mの土坑状の遺構となって、やがて浅くS D19と合流して終わる。S X04・S D17から28ℓ入りコンテナに1箱分の須恵器片と僅かの土師器片が出土した。遺物の大半は、S X04・S D17が深くなる西側の周辺に集中して出土した。須恵器壺が多く壺・坏・高坏などの器種がある。

S D18はいま述べたようにS D17と直角に合流する溝状遺構で、南半部は幅0.8m・深さ0.2mの規模である。北半部は幅0.8mと推定されるが、東側の肩が後世の削平を受けている。S D17との切り合い関係はなく同時期の遺構と考えられ、遺物は出土しなかった。

S D19は、幅0.8~1.5m・深さ0.05~0.2mの溝状遺構で、緩やかな逆C字形に検出された。東側斜面でS D17を切る。しかし斜面での切り合いであるためS D17の堆積土がS D19の部分を覆うところもあり、仮にS D19がS D17を切る関係とする。須恵器壺・壺・坏片が出土した。

S K12・S K13は、G-4区で検出された土坑である。S K12は、直径2.0m・深さ0.4mの不整円、S K13は、長径2.9m・短径2.1m・深さ0.2mの卵形である。S K12から須恵器が1片出土した。S K13からの出土遺物はなかった。

S K14

S K14はG-5区で検出された、長径1.6m・短径1.3m・深さ0.2mの椭円形の土坑である。須恵器・坏蓋は半分ほど破片である。坏身が上、坏蓋が下となって重なるように検出された。坏身の底には、朱が付着していた。坏身蓋は、直径・時期が異なり、セットとはならない。本米の位置を保たない遺構であろうか。

S K15は、F-5区で検出された、長径0.6m・短径0.3m・深さ0.05mの卵形の土坑である。須恵器坏片が出土した。

S K16は、H-2区で検出された、直径0.5m・深さ0.05mの円形の深い土坑である。出土遺物はなかった。

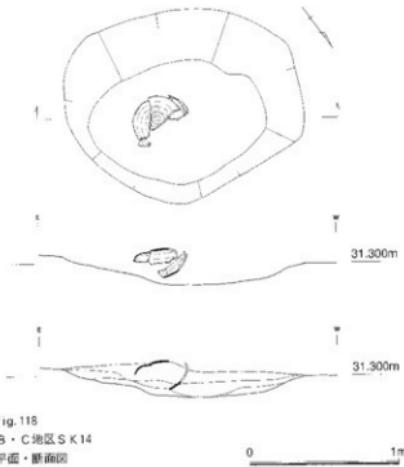


fig.118
B・C地区S K14
平面・断面図

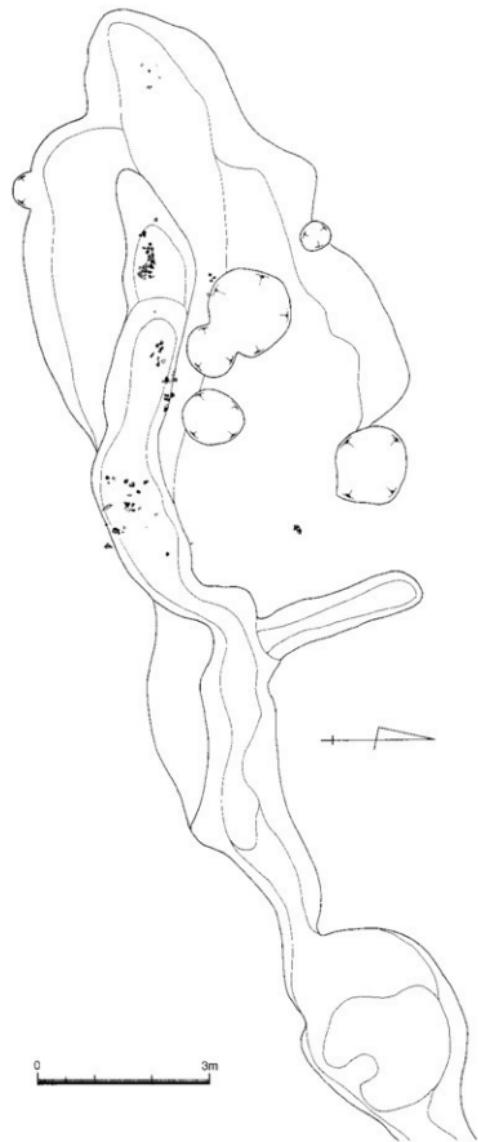


Fig.119 B·C地区SX04·SD17平面图

(3) 出土遺物

fig. 119は須恵器壺である。

S X04・S D17・S D19などの遺構から破片で出土したものと接合したものである。

口縁部は内外面とも自然釉が付着し、肩部や底部には歪みが見られ、肩部には他の須恵器片が窯着している。

この壺のようにS D17周辺で出土した須恵器壺片が3個体以上あると考えられる。その他に須恵器壺・提瓶などの破片が出土している。どの遺物も小破片に割れており、後世の削平により遺構面も損なわれたと考えられ、完形品に復元できるものがほとんどない状況であった。

この出土状況は、S X04・S D17・S D19などが古墳の周溝と仮定すれば、周溝などで行なわれた墓前祭祀の可能性も考えられる。

fig. 121の414～419は碧玉製管玉である。II-5区で半径0.7m以内、高低差0.2mの範囲でまとめて出土した。

出土位置を実測しながら取り上げを行なったが、管玉が連続した出土状況ではない。

全て深緑色である。414と418は図下に丸い凹み部分が

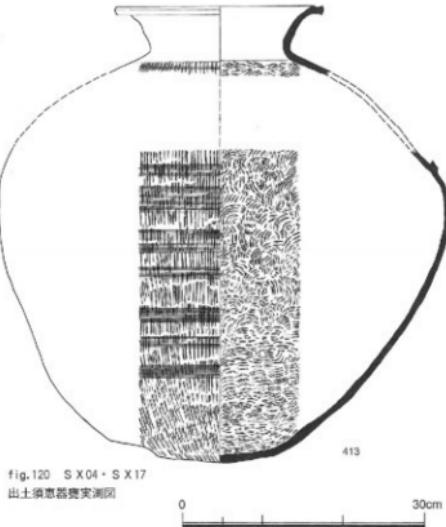


fig.120 S X04・S X17
出土須恵器壺実測図

0 30cm



神園写真20 S X04・S D17出土須恵器壺

ある。415と417は深緑色に白色から灰色の縞がみられ、石材が均質ではないようである。

420は6面とも使用された、黄色の砂岩系の砥石である。

421～427は、地山面に堆積した黄灰色泥砂層から出土した須恵器および埴輪である。424は提瓶である。図上に復元した。425は短頭壺、426は小型壺と考えられる。

427は須恵質の埴輪である。外面はタテハケ、口縁部は横方向のナデ、内面はタテ方向

のナデである。

428・429はSK14出土の壺身・壺蓋である。蓋と身は組み合わないようである。しかしぶ別の意味があるものであろうか。429の網点部分が朱の付着部分である。

430はSK05出土の須恵器壺である。壺の底から出土した口縁部破片と壺体部とを図上で復元した。肩部分の破片は調査後の整理でも見つからなかった。後世の削平を受けた時に失われたものと考えられる。焼成は良好で、暗灰色である。内面には同心円文タタキを一部消すようなナデがある。外面底部に壺の直径とおなじ痕跡が3カ所あり、壺内で壺などで正立させ焼成したことが考えられる。

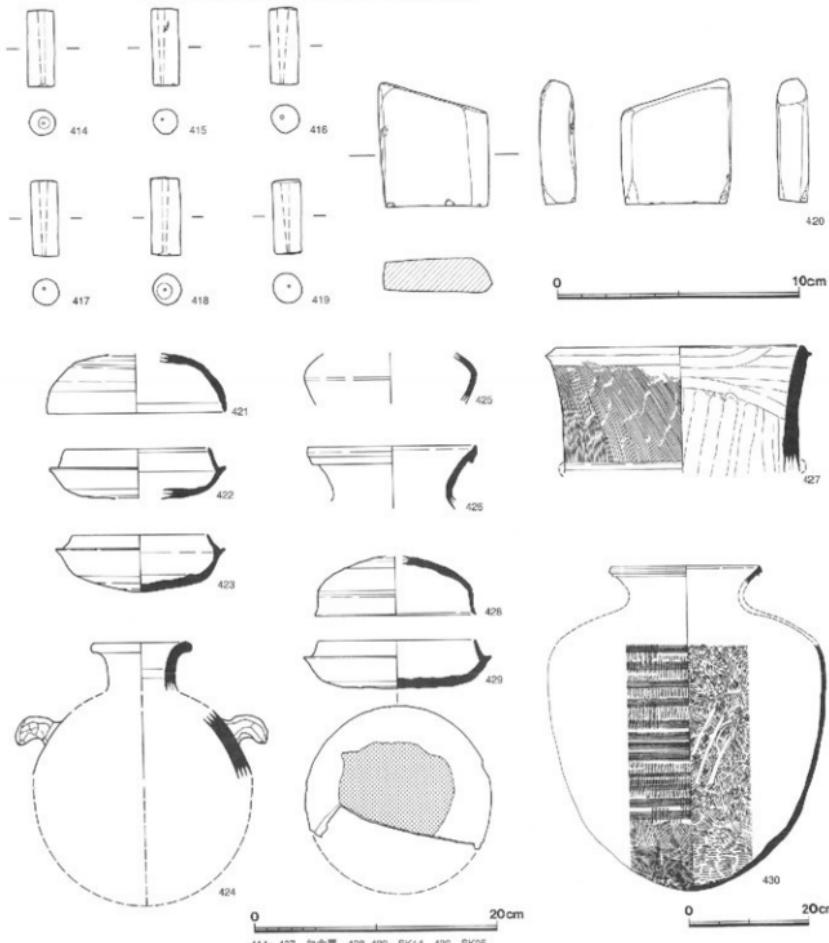


fig.121 B+C地区出土遺物実測図

(4) 小結

当調査地の遺跡の時期は、概ね6世紀を相前後する頃と考えられる。古墳時代の遺構は、調査面積に比べ密度は低いといえる。しかしながらSD01とSK05の検出は、後世に削平を受けたとはいえ古墳の存在した可能性を示す。図上では直径20mの円墳として復元することができる。

またSD17・18・19の溝状遺構も一辺12mほどの方形墳の周溝であった可能性が考えられる(fig.129)。SD01とSD17・18・19とに区画された古墳がそれぞれ1基づつ、当調査区西側の大塚古墳1基と数えれば、計3基からなる古墳群が当調査区周辺に存在したこととなる。

またH-5区の碧玉製管玉の出土数は、1個という数ではなく6個が比較的近接した箇所でまとまって出土している。出土状況からの判断であるが、古墳が破壊された結果を示すものと考えられる。しかしながら古墳が破壊された時期は不明である。

ここでSD01から復元される周溝ラインと大塚古墳で検出された周溝から復元される、復元図をかかげておく。

(口野)

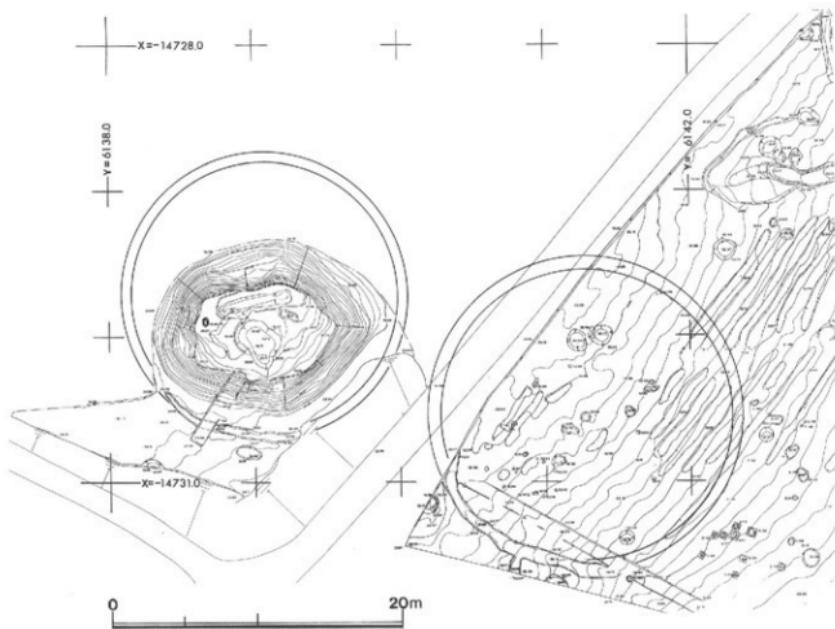


fig.122 A・B地区古墳周溝復元図

第2節 高津横大塚古墳の調査

(1)はじめに

調査の経緯についてはB・C地区と同様である。B・C地区の調査と並行して、平成8年1月9日から本格的に伐採作業に入った。平成8年3月27日まで古墳主体部内の調査が一段落した。古墳主体部の構造などの調査は次年度に調査継続として平成8年4月3日から調査を再開し、5月31日まで調査を行った。

(2)調査方法

現況は雜木林のため、まず伐採を行った。伐採後墳丘の現況実測を行った。実測後表土層から人力により掘削作業を開始した。測量及び地区割りについては、古墳の東側で同時に並行で進めている調査と同じ地区割りと基準点測量を利用した。またB・C地区と同時に航空写真測量を実施した。

(3)墳丘の調査

古墳の現況の墳形は楕円形で東西15.5m・南北11.5m・高さ2.2mの規模を持つ。北側斜面には崩落が認められる。墳頂のほぼ中央には盜掘坑と思われる凹みが2ヶ所ほど認められた。また古墳北側の敷地は、地山まで削平を受け平坦に造成されている。墳丘表土層から土師器片・須恵器片が少量出土した。土師器片は古墳時代前期頃の高杯で、須恵器片は6世紀以降の臺である。

墳丘南側

古墳の南側はほぼ平坦で、層序は表土・間層・地山となる。間層は薄くはとんど遺物は出土しなかった。地山は礫を多く含む赤褐色泥砂層である。表土層から少量の土師器片と近現代の陶磁器類が出土した。ここでは溝状遺構と土坑が検出された。

S D01は墳丘南側で、墳丘に沿って円弧状に検出された溝状遺構である。幅0.6m・深



Fig.123 高津横大塚古墳現況及び主体部復合図

さ0.1mの浅い溝で、約10m程検出された。東側は後世の掘削による崖状地となり、切られている。西側は墳丘西側で浅くなり終わっている。規模から周溝ではなく、古墳築造に際し、平面上で墳形を区画するために利用した溝と考えられる。SD01の描く円弧から図上復元すると半径10mの規模の円墳が想定される。先にも触れたが、墳丘北側斜面には崩落が認められることから、後世に土取りなどによって崩落があったと考えられる。

SD02は調査区南西隅で検出された幅0.5m・深さ0.1mの溝状造構である。遺物は出土せず、古墳時代の遺構か不明である。

SK03調査区南東部で検出された幅0.6m・深さ0.1mの溝状の土坑である。土師器片が少量出土した。

墳頂部の遺構

SK01は、墳頂東側で検出された長径1.4m・短径0.6m・深さ0.1mの楕円形の土坑で、埴輪の小破片が少量出土した。

SK02は、墳頂西端で検出された長径0.6m・短径0.4m・深さ0.3mの楕円形の土坑で、SK01と同様に埴輪の小破片が少量出土した。

墳頂中央には東西約2.5m・南北約3.0m・深さ約0.5mの盗掘坑と思われる攪乱坑が存在する。調査当初試掘トレンチで確認されたプランが当古墳の主体部であると考え、調査を進めたが、結果としては攪乱坑であることが判明した。

SX01は攪乱坑に切られる、主体部を築造する際に埋め戻された遺構と考えた。しかしSX01内の土は、墳丘中央に向かって堆積を繰り返していることが土層の観察から判明した。つまり墳丘盛土層のある単位を遺構として検出したものと思われる。最上層から土師器片が少量出土した。

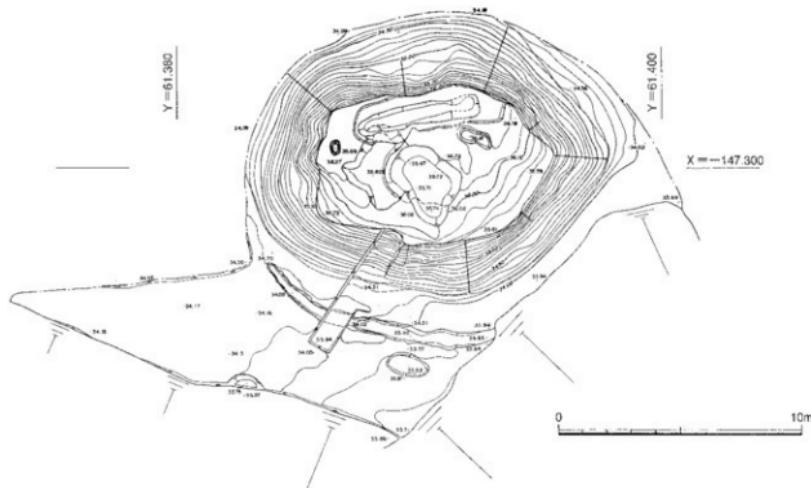


fig.124 高津橋大塚古墳平面図

(4) 埋葬施設

主体部

主体部は現況の墳丘の北端に存在する。築造時の墳丘は直径約20m (fig. 122参照) に復元され、墳丘の北半部分は後世に土取りなどによって、墳丘は損なわれている。

主体部の主軸はやや北にふるが、ほぼ東西方向 (E 12° N) である。墓壙掘形は、東西6.4m・南北1.8m・深さ0.8mで、墳丘北側の崩落により北側東西辺は失われている。後世の土取りのためであろうか。さらに北側にも存在すると考えられる周溝もまったくなく、先述したが北側の造構面は損なわれている。

棺掘形は、東西5.4m・東端部南北0.8m・西端部南北0.9m・深さ0.3mである。棺掘形は、墓壙掘形の西に偏っている。墓壙掘形と棺掘形の西端では0.1mと西端に寄り、東端では1.0mと離れている。また北側東西辺は直線的に検出されず、南側東西辺に比べ棺の崩れが大きかったのであろうか。

棺は、黄白色の粘土を敷いた上におかれている。粘土の検出状況から東西5.2m・南北0.6mの範囲で棺床が敷かれている。検出された粘土の上面には赤色の顔料が一面に塗布されている。粘土の面は弧状を示し、この弧から復元される割竹形木棺の直径は約0.5mと考えられる⁽²⁾。

埋葬施設

引き続き8年度での作業は、埋葬施設の調査と墳丘盛土の精査である。平面的には、東西約5.3m・南北約0.8mの規模で棺床となるように黄白色の粘土が敷かれている。

棺底となる粘土は、東西端部は棺底より約0.15mの立ち上がりがあり、厚さも約0.1mある。棺小口を安定させる為かと考えられる。

これに対し棺底部の粘土の厚さは厚いところでも約0.03mと薄く、棺西半部では後述する疊敷の礫の頭が現れる。粘土は東西小口はやや厚いものの、中央部分は薄い。また粘土は中央部分はやや高く、東西両端が低く、弓形に反ったように検出された。

白玉は、粘土の掘削の過程で58個出土した。主体部の粘土の広がりを中心に西から5区分して白玉などの取り上げを行った。結果1区は0個、2区1個、3区3個、4区45個、5区9個の小計58個の出土状況であった。やはり鏡が出土した4区で最も多く出土した。

白玉はまとまって出土するのではなく、粘土部分から不規則に検出されるという出土状況である。

同じく粘土の掘削の過程で粘土西端部で、東西約1m・南北約0.2m程度の範囲で赤色顔料が検出された。

不規則な白玉の出土状況と面的な広がりをもつ赤色顔料気の塗布から、粘土床を築造時に一気に築造せずに、埋葬施設を築造するに必要な過程、例えば何らかの祭祀の過程を踏んで築造されたのではないかと推測される。

粘土床と墓壙掘形の東西辺と粘土床東小口と東側掘形の空隙には、鉄器類の出土が予想されるが、慎重に掘削を行ったが全く出土遺物はなかった。

粘土を除去すると東西約5.2m・南北約0.4mの細長い範囲で疊敷が検出される。敷かれた礫は、付近の地山の露頭面に見られるチャートの円礫と同じもので、径0.05~0.1mの大きさの礫を用いている。疊敷の断面は、東西端がピット状にやや深く、(東端深さ0.1m・西端0.3m) 中央部は浅く、浅いところでは0.1mである。敷かれた礫は、周縁部や上面を

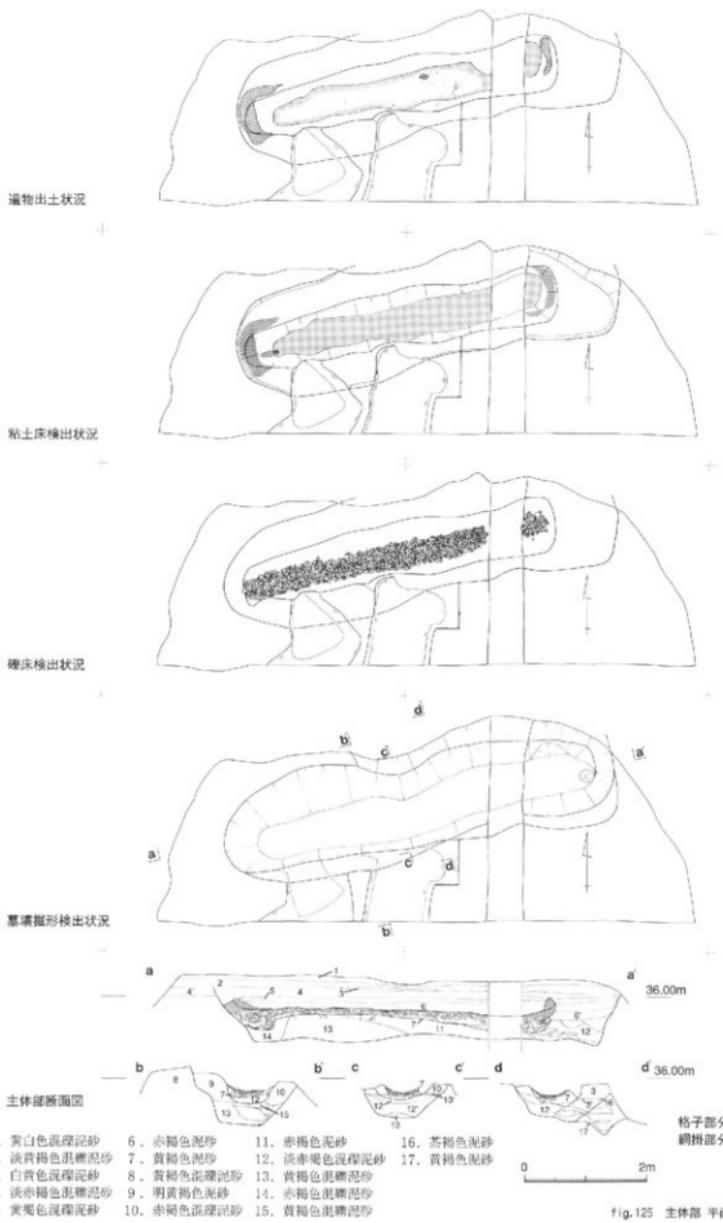


Fig. 125 主体部 平面·断面图

面的に特に描えているということはない。

砾敷の東西方向の断面観察より、棺底部粘土のところでも触れたが、砾敷の上面も中央部分がやや高く、東西両端に低く、弓形に反ったように検出された。

墓壙掘形内の土は、均質なものではなく西側はやや砾を多く含み、東側は土がブロック状に埋められた状況が観察された。墓壙掘形の完掘後の規模は、東西6.7m・南北1.7m・深さ0.8mである。墳丘北側の崩落のためか墓壙掘形の形状は、ビーナツの殻の形状のようにまんなかが少し広んだ長楕円形である。少量の土師器小片が出土した。

また墓壙掘形の断ち割り時に墳丘盛土から少量の土師器小片が出土した。時期などについては、不明である。

(5) 棺内出土の遺物

鏡

鏡は、1面棺東端より2.0m北際でやや東方に傾斜して棺底より出土した。直径は、78mmの撰文鏡である。外区は素文、内区は外周より外向縦文・横文となり、次に四乳を配して乳間に各3個づつ撰文がある。撰文は半肉彫で三日月状に鏡察され、乳を挟むごとにその方向を変える。一般的には撰文が風車状に同一方向に向くが当例では、この点が特徴的である。撰文の組紐状の表現は簡略化されており、撰文の周囲には細線による獸毛文がみられる。獸毛文も実測図上方部分では判然としないところがある。鉢座は圓線と横文が配されているようであるが、一部を除き判然としない。鏡の名称については、現状では撰文鏡（变形四獸鏡）としておく⁽³⁾。

次に保存処理を行う過程で明らかになった諸点について述べる。色調は遺存部分の表面は漆黒色で、サビは緑色から緑灰色である。遺存状況は、孔食性のサビが全体に進行している。鋳上がりは、細部まで鋳造されているが、缶の影りがあまかったようである。またX線透過写真的観察から、左下方の文様が他の箇所に比べやや不鮮明である。研磨については、顯微鏡観察から鏡面、鏡背ともに細部にわたって防錆処理を施すために、何らかのものを塗布していたと推測できる。

鉢の消耗については、図下方の鉢孔は鏡背面に平行

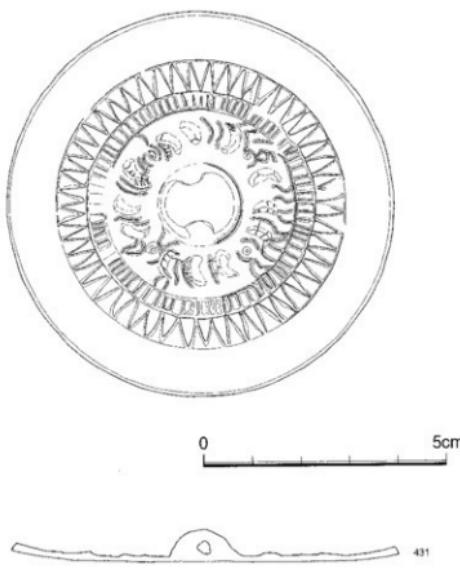


fig.126 主体部出土鏡実測図

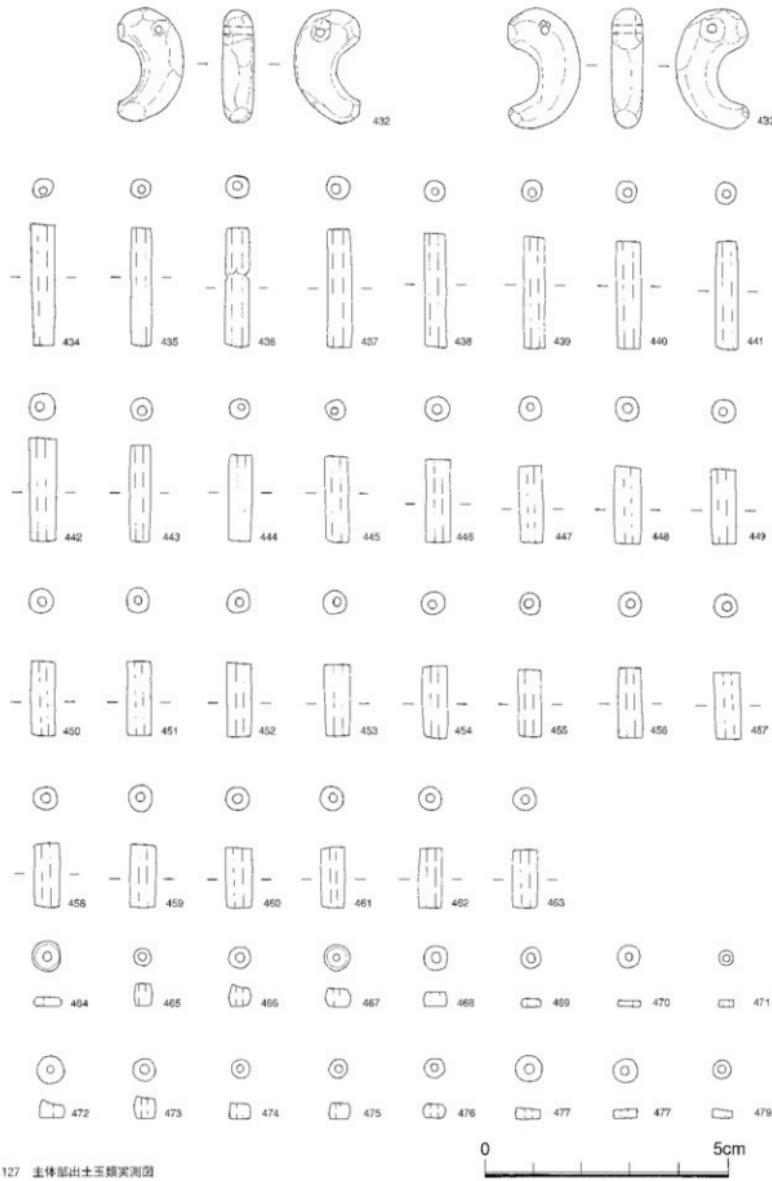


fig.127 主体部出土玉片实测图

して左右方向に、他方も同様に左右方向とさらに直交する鉢頂点の方向に磨耗が顕著に見られる。

玉類

玉類は、勾玉・管玉・白玉の3種が出土した。その大部分は、鏡から東約0.5mの辺りに集中して検出された。

勾玉は、2個出土した。大きさは、長さ24mm・幅9mm・厚さ7mmと長さ22mm・幅9mm・厚さ6mmである。2個とも濃緑色で滑石製と思われる。

管玉は、30個出土した。鏡から東約0.5mの辺りに集中して検出された。2個続いたかのように検出されたものもあるが、規則性は見い出し難い。大きさは、長さ11~25mm・直径4~5mmで長さにばらつきがあり、長・中・短に分類すると長(22~25mm) 7個・中(21~17mm) 4個・短(16~12mm) 19個と中間のものがやや少ない傾向がある。

白玉は、完形のもの289個とほかに破片となったものが出土した。棺底の赤色顔料を敷いた粘土上面（その他検出作業中6個）もしくは粘土内（58個）から検出された。検出状況からは、規則性は判断しがたい。

基本的には鏡の東約0.5mの辺りに集中して検出（225個）されており管玉もこの周辺以外からは出土していない。

白玉の大きさは、直径4~5mm・高さ1.5~4mmで、形態は、偏平なもの・断面形が白形・算盤玉・台形などである。また材質は滑石製で、濃緑色・淡緑色・緑灰色・灰白色などの色調を呈する。丁寧に成形し仕上げられたものからやや粗雑なつくりのものまで、大きさ・形態・色調は、様々なものが混在している。いま述べた白玉の主なタイプのもの16個図示した。

（6）墳丘の盛土

墳丘はすべて盛土によって築造されている。また地山面は現況の地山面は墳丘のはば中心部が墳丘裾に比べて、0.2~0.3m高い。現状では地山を成形したのか自然地形を利用したのかは不明であるが、こののはば平坦な地山面から盛土を始めている。

地山直上に、まず粘質な礫混じりの砂泥を0.1~0.2mを全面に突き固め、さらに墳丘裾より約2m内側に少量の礫が混じる白色粘土を、中心では0.3~0.4m、周辺部で0.1m積んでいる。この白色粘土は、顕微鏡観察では比較的均一な粒子であることが判明した。恐らく自然に淘汰された粘土を持ち込んだものと思われる。

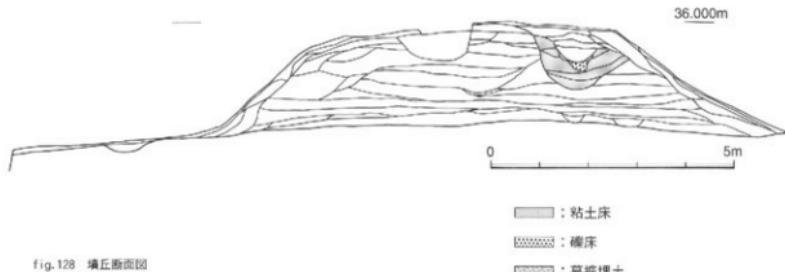


fig.128 墳丘断面図

次の段階として、墳丘外側に土堤状に土を盛り、内側へ土を盛ってゆき、これを繰り返し行うことによって、墳丘を高くしていっているようである。これは前述したS X 01の堆積状況からも同じことがわかる。

最後に墳丘を覆うように疊の少ない土をのせている状況が観察された。これは表土直下の断面に残された部分的な土層からの類推であるが、墳丘表面を覆う工程があったと考えられる。また土層観察から土盛りの最小単位として、厚さ0.1m・長さ0.5mのブロックが部分的に観察された。

墳丘の盛土の記録保存方法として剥ぎ取りによる土層転写を実施した。土層転写は墳丘東半分の面について行った⁽⁴⁾。

(7) 古墳の築造時期

古墳の築造時期については、時期を決定付ける遺物がなく判断に苦しむところである。墳丘表上層から土師器片・須恵器片が少量出土した。土師器片は古墳時代前期頃の高坏で、須恵器片は6世紀以降の壺である。墳丘盛土内からの出土遺物も微量で小破片であるため時期は不明である。墳頂部の埴輪内から少量の埴輪片と考えられるものが出土しているが、これも小破片であり、時期決定をするための材料となりにくい。

埋葬施設の遺物で、鏡の編年観から言えば5世紀後半と考えられる。これに玉類の組み合わせを考慮すれば、5世紀後半のなかでも6世紀により近い時期を当てるのが妥当であろう。いずれにせよ時期を決定付ける要素に欠ける状況である。

(8) 小結

『明石史資料』⁽⁵⁾には「伊川谷村潤和方面踏査の記」の記載があり、「……大谷村の大塚山に向ふ、大塚山には大圓墳一個あり……」とあり前後の記述から当古墳の記事と考えられる。これにより少なくとも大正年間には、当調査地が古墳として認識されていたことがわかる。

当調査区東約200mの延命寺古墳⁽⁶⁾、さらに白水瓢塚古墳⁽⁷⁾・天王山古墳群⁽⁸⁾へ伊川下流域右岸約1kmの範囲に15基前後の古墳が連なる。また高津橋大塚古墳の北約700mには、平成8年度の調査で全長約20mの帆立貝式古墳の水谷大東古墳⁽⁹⁾が検出されている。墳丘は削平を受け周溝のみが確認された。円筒埴輪が墳丘に樹立されており、他に周溝内から鶏形埴輪・須恵器などが出土している。古墳の時期は5世紀末から6世紀初頭とされている。

周辺の丘陵上に多くの古墳が存在することから、現状で把握されている資料より周辺の古墳の築造時期などを羅列し、高津橋大塚古墳の位置付けを試みる。

周辺で最も古い時期とされるのは、天王山古墳群第4・5号墳である。当古墳は明石川流域でも最古とされる古墳である。ついで白水瓢塚古墳があげられる。明石川流域では最古の前方後円墳である。ついで時代順に並べていくと天王山3号墳・鬼神山古墳⁽¹⁰⁾・天王山1・1-2・2号墳から天王山6号墳と続く。墳形としては白水瓢塚古墳の前方後円墳を除き他は、円墳・方墳・帆立貝式古墳である。埋葬施設は白水瓢塚古墳は不明であるが、他はおもに木棺直葬である。

4 世紀代と考えられる天王山4・5号墳は、前時代から続く台状墓や墳丘墓としての

系譜が考えられている。この系譜が考えられる古墳は明石川左岸の西神ニュータウン内道跡で多く知られている。

4世紀後半の時期に白水瓢塚古墳が築造される。明石川流域では前方後円墳の系譜を連続的には追えない。続く時期の前方後円墳は中期と考えられる吉田王塚古墳で、明石川の下流域に築造される。また白水瓢塚古墳周辺に存在する円筒埴輪棺は当時の階層差を示しているのであろうか。

4世紀末から5世紀代には、周辺では確実な古墳は知られていない。6世紀前半には帆立貝式古墳である天王山3号墳や鬼神山古墳が築造され、続いて天王山1・1-2・2号墳が続く。6世紀後半に天王山6号墳を最後にこの周辺では古墳の築造は終焉に向かえるようである。

畿内政権と密接に結びついたと考えられる前方後円墳が、当地域では断続的かつ軋的にしか築造されない。反対に当地域の木棺直葬の葬制が連続しかつ展開していくようと思われる。

高津橋大塚古墳の築造時期を5世紀末頃と仮定すれば、このような時期の当地域の葬

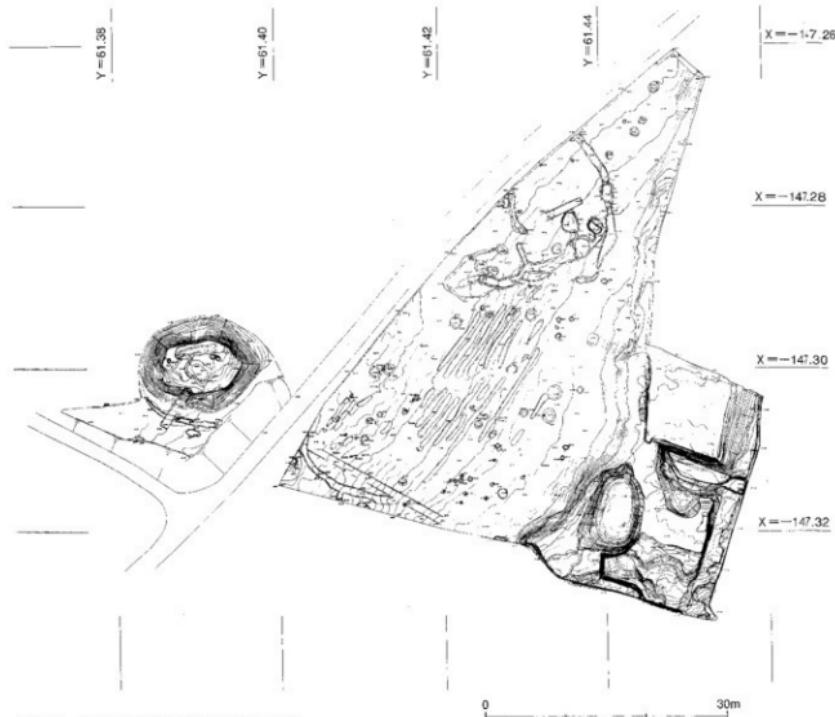


fig.129 高津橋大塚古墳及びB・C・D地区平面図

制を引き継いだ一古墳であると言えよう。また当地域の統合の一過程と考えられよう。

また次節に述べる畿内を中心に出土するとされる石見型盾形埴輪のD地区での出土は、上記の畿内政権からの古墳葬制の欠落する時期に、畿内政権からの一定の布石とともに可能であろう。

いずれにせよ畿内に存在した政権の直接的な影響を被ったかという点については不明であるが、当地域における人々の活動の一部が垣間見えたように思われる⁽¹⁾。

古墳が連なる丘陵からは、伊川・永井谷川が形成した段丘地を見下ろす事ができ、単純化すれば谷奥から順次当地域の権力者が古墳を築造していくと言えよう。系譜やその詳細な時期については今後検討を要するが、高津橋大塚古墳の調査は重要な意義をもつと言えよう。

(口野)

註

- (1) 葉茨についての調査結果は、眞野 修氏の照会により河合正廣氏から調査結果をいただいた。調査結果は「信管に記入されている記号及び数字は、製造場所（製造会社）とその工程を表します。TWは地名のTwin Cityを表し、Army Plantで製造したことになります。4は工程の番号で1から始まり、現在では4桁の数字を使っております。4を使っていることから判断すれば、40年以上まえに製造された物と考えられます。米軍の艦載機は12.7 mm機関銃を搭載しておりますので、この葉茨は大戦中の米軍艦載機のものとする可能性は十分考えられますが、爆撃機（B-29）にも搭載されております関係上、艦載機のものと断定することはできません。」とのおりである。
- (2) 墓頂部の箇所で、土坑や擾乱坑の調査から主体部の存在が確認できなかった。このため墳頂部全体を下げながら、主体部を検出する作業に切り替えた。これと同時に墳丘の断ち割り作業を実施した。一連の作業途上で、主体部の一部が確認された。調査写真には主体部に断ち割りが入った状況のものとなってしまった。
- (3) 出土鏡については、以下の文献を参考にした。
樋口隆康「振文鏡」「国解考古学辞典」水野清一・小林行郎編1959
伊藤慎樹「振文鏡小論」考古学研究第11巻20号1967
小林三郎「振文鏡とその性格」「日本古代史論苑」遠藤元男先生頌寿記念会編1983
「樋口山51号墳」樋口山51号墳刊行会1991
森下草司「彷彿鏡の変遷」「季刊考古学」第43号1993
- (4) 墓丘の断ち割り作業については、まず墳丘の保存について開発担当部局である整備公社に協議を申し入れた。しかしながら墳丘付近に予定されている都市計画道路の設計変更については、事業計画そのものに多大な影響を及ぼすことであった。墳丘の保存は不可能となつたため、記録保存の方法として墳丘の断ち割りを行い、断面図の作成や写真撮影と土層転写などをを行うこととした。
- (5) 「明石史料」明石史談會1925
- (6) 多田敏樹・喜谷美宣「延命寺古墳」「日本考古学年報」27 1976
- (7) 直良信夫「白水大塚塚とその近周の合口塚」「近畿古代文化叢書」1943
山本雅和「白水大塚古墳」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会1990
山本雅和「白水大塚古墳」「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1996
- (8) 喜谷美宣「天王山古墳群発掘調査概要」神戸市教育委員会1972
須藤宏「天王山古墳群」「昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1990
- (9) 神戸市教育委員会・財神戸市スポーツ教育公社「水谷人丸古墳現地説明会資料」1996
- (10) 楢川 長「鬼神山古墳」神戸市文化財調査報告9 神戸市教育委員会1967
- (11) 都川比呂志「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱－」「日本史研究」343号1991。都出「古墳が造られた時代」「古墳時代の王と民衆」古代史復元6 1989. などに通底して展開される首長から最底辺の人々があたかも存在することを前提とし、前方後円墳体制という体制下に古墳時代が統一されたかのように、各個地域の特徴ある展開をかえりみない歴史観も存在する。

第2章 第2次調査の成果（平成8年度）

第1節 高津橋大塚遺跡D地区

(1) はじめに

D地区はB・C地区の東に隣接する箇所である。調査経過については繰り返し述べないが、A地区で古墳1基確認され、B・C地区では古墳の周溝と考えられる溝などが検出された。A地区的調査と平行して平成7年5月9日より調査を開始した。

B・C地区の東端部では埴輪が多く出土する箇所（SD16）があり、D地区は現況が埴丘状に観察されるため、古墳としての調査を行うこととした。地区割りや測量基準杭については、隣接のB・C地区的ものを踏襲した。またB・C地区との調査と接合するため航空写真測量を実施した。

伐採作業後現況の実測作業を行い、東西と南北方向に試掘トレーンチを設定し試掘調査をおこなった。伐採後の現況は、fig.130左側に示すように古墳の埴丘状に観察された。試掘調査によって、特に北側・東側については現代の盛土が厚く存在することが判明したため、盛土層については重機により掘削を行った。埴丘状の箇所については人力により表土より順次掘削を行った。

(2) 調査の概要

埴丘の上面での調査では、精査を繰り返し行ったが埋葬施設などの痕跡は判明しなかった。埴丘西側は前年度調査で埴輪片が多数出土したSD16の延長線上にあり、溝状造構として調査を行った。

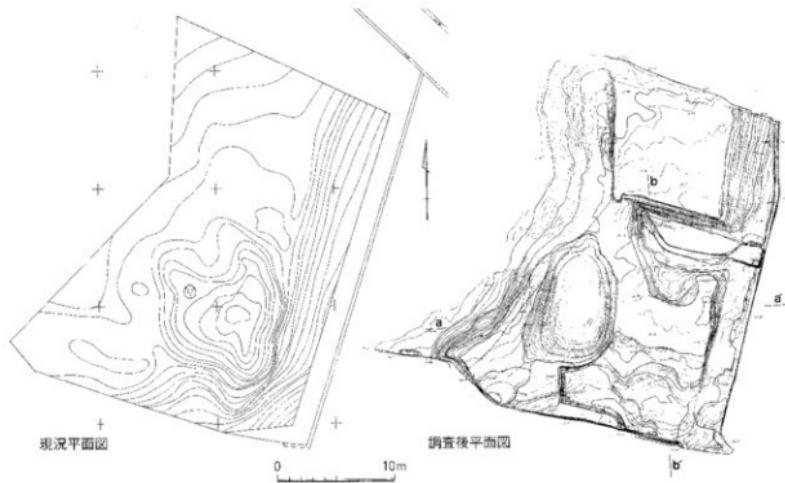


fig.130 D地区 平面図

溝状造構の最下層に当たる層で近世陶磁器が出土した。さらに調査を進めた結果、古墳墳丘と考えられた盛上の下へ7～9層が入り込んでいることが判明した。fig131で破線で示したところが墳丘の想定ラインである。7～9層が、3層の下にあり9'層から近世陶磁器が出土した。この造構は東側に広がり、地山を切り込んで掘削されていることが判明した。

結果的には東西約6.5m・南北約10.3m・深さ1.7mの橢円形の落ち込み状造構（S D20）となった。土層の堆積状況から溜め池状の造構ではないかと判断される。他に埴輪片・須恵器片などが出土した。

墳丘南側では、現代の盛土と墳丘盛土が厚く堆積していた。墳丘盛土層を除去すると東西約5m・南北約4m・深さ0.3mの落ち込み状造構（S X06）が検出された。fig131の10～14層がS X06の堆積層である。堆積土は砂質で斜面に流れ込んだように観察される。

この堆積土から埴輪片・須恵器片が投棄されたように多量に出土した。埴輪は円筒埴輪が大部分を占めるが、人物・家形・盾形埴輪等も出土した。また船形埴輪と考えられる破片も認められた。須恵器はその多くは壺であるが、坏・高坏等も少量出土している。しかしながら同一のS X06の堆積層よりS D20と同様に近世陶磁器が出土した。

以上のことから墳丘と考えられた箇所は近世以降の盛土であることが判明した。この盛土を削除すると地山面となる。この面からは北側へ落ち込むS X07以外には造構は検出されなかった。S X07からは遺物は出土しなかった。

全体の遺物量は281入りコンテナで27個で、うち埴輪が23個残りが須恵器である。土師器は全体の遺物出土量に比べ微量であった。

(3) 出土遺物

須恵器

480は径の小さい壺蓋である。S D20上面で出土した。481・482はS X06から出土した。483はS D16・S D20出土の破片を接合したものである。内面に同心円タタキがあり、それをナデによって消している。484・485は表土層調査中の出土遺物である。486はS X06から、487はS D16からの出土である。486・487は提瓶の口縁部かと思われる。

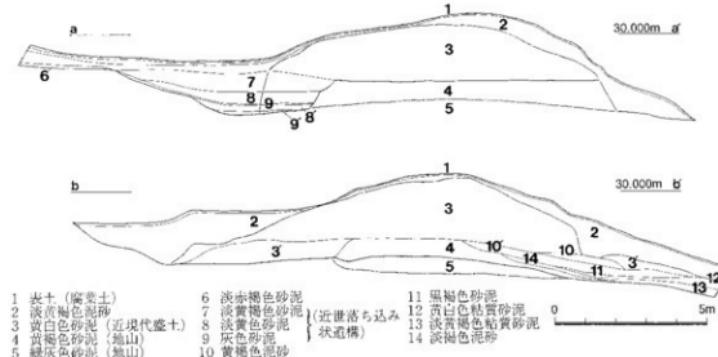


fig. 131 D地区東西・南北断面図

488はS D16・20・S X06出土の破片を接合したものである。中型の壺と思われる。S X06の出土遺物は、破碎されたかのような破片で出土しており、特に須恵器は細片となっている。後世の堆積時にも削れたと考えられるが、それ以前の破碎行為があったように見られる。前章でも述べたが、土器・埴輪を意識的に破碎する行為があったかに思われる。

埴輪

高津橋大塚遺跡（D地区）から出土した埴輪は281コンテナで23箱にものぼるが、出土した場所は遺構埋土ではなく、盛土内から出土している。そのためかつて同じ古墳に樹立されていたとは必ずしも言えない。しかし高津橋大塚古墳においては埴輪が1点も出土していないことと、この埴輪群の出土位置がある程度かたまっていることから、かつて同じ古墳に樹立されていたものと考えている。器種は円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・人物埴輪が出土している。他に船形埴輪と思われる破片も出土している。（口署）

円筒埴輪

出土した円筒埴輪は完形品がないものの、口径21.5~30cm、底径16~20cmでおそらく3条突帯が付く4段の円筒埴輪に復元できる。その中で494は他の埴輪と比較すると段間が長いため、2条突帯の付く3段構成である可能性もある。半分以上残っている個体はなかったが、スカシ孔は2・3段目に直交する位置で、おそらく1段につき2つのスカシ孔が設けられている。突帯は低いM字形と三角形のものがあり、断続ナデによる突帯成形が第1段目に行われている個体も存在する。口縁は外反して面を有するタイプが確認され、一部の破片には倒立して成形したと考えられる痕跡が認められる。全体の形状としては第1段目から上段にむかって、ラッパ状にひらくものと考えられる⁽¹⁾。

調整は外面ナメハケによる1次調整のみで、2次調整は行っていない。1段目についてはハケ調整の後ユビナデを施している。外面ナメハケは段ごとに起点の高さを揃え、横にずらしながら施している。ハケ工具は9~11条/cmの細かいタイプと4~5条/cmの粗いタイプが存在する。細かいタイプは内面ナデ調整であるのに対して、粗いタイプは最上段にのみヨコハケを施している。また494についてはハケ調整を終えた後「X」のヘラ記号を記している。ヘラ記号が確認できたのは1点だけである。

焼成は非常に良好で、硬質で灰色に焼き上がっている個体が、黄橙色で土師質のものより多い。しかし成形時に空気を内包しているせいか焼き歪みが生じたり、破裂している個体もみられる。粗いハケ工具のものには土師質が多く、細かいタイプは須恵質が多い。胎土は砂粒をほとんど含まず、土師器よりは須恵器に近い胎土を有している。

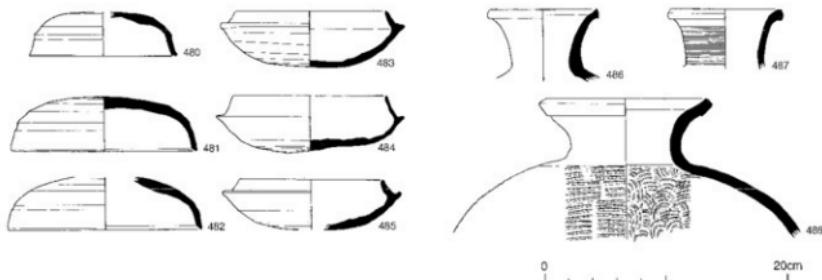


fig. 132 D地区出土須恵器実測図

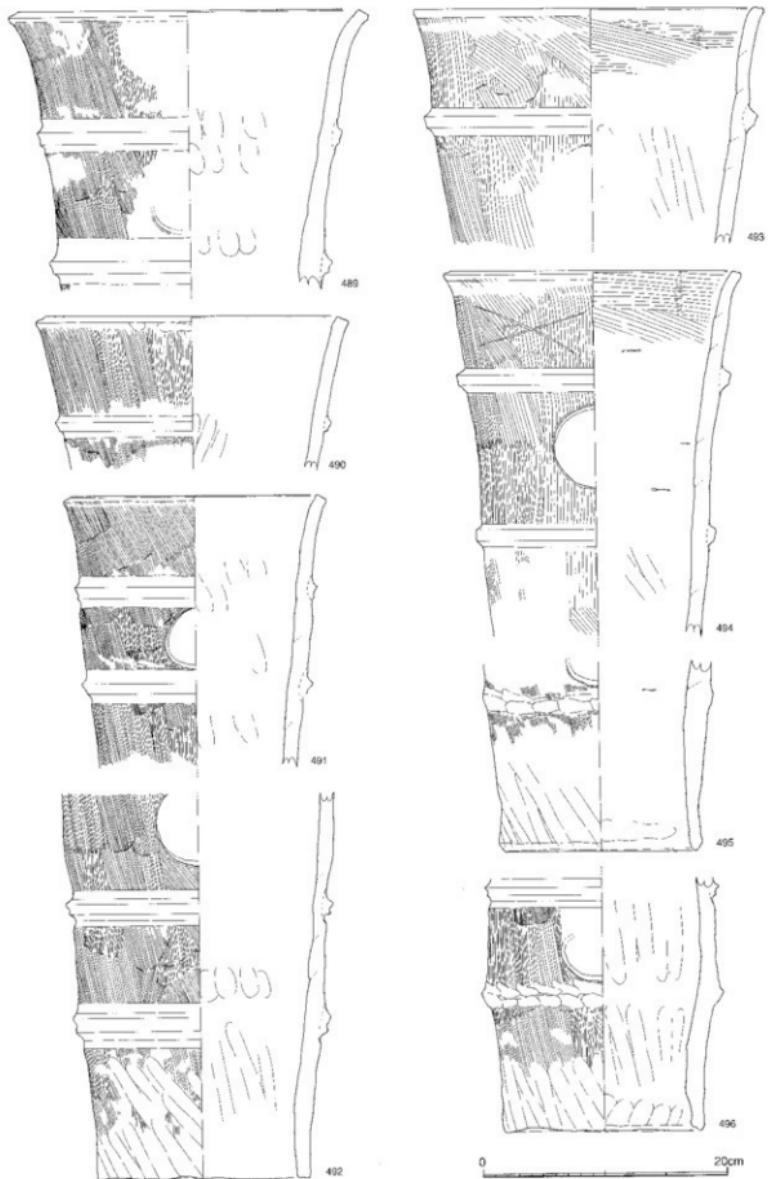


fig.133 D地区出土青铜编钟实物图

朝顔形埴輪は頸部の破片が1点確認されたが、頸部に突帯をまわすものの、その突帯は低く、わずかに貼り付けた程度となっている。

家形埴輪

少なくとも2個体の破片が出土している。その内497は寄棟の屋根部である。外面全体に細かいタテハケによる調整を施し、内面はナデ調整をおこなっている。屋根部上端は欠損しているが、押縁による突帯が確認できる。屋根部中央には表側上方から裏側下方へ斜めに穿孔したスカシ孔がみられる。黄白色を呈し、胎土は良好で非常に硬質である。

498~500は裾廻り突帯をもつ壁体部分の破片であり、503は棟の部分にあたると考えられる。いずれも粘土紐による成形で、器盤は全体に厚いことから大型の家と考えられる。また突帯が縦・横の両方向にもみられることから、大陸造り建物の表現であると考えられる⁽²⁾。表面は磨滅しているため調整は不明だが、外面には3本1単位の線刻がある。黄橙色を呈し胎土は粗く土師質で、焼成、胎土共に497の家形埴輪とは異なっている。

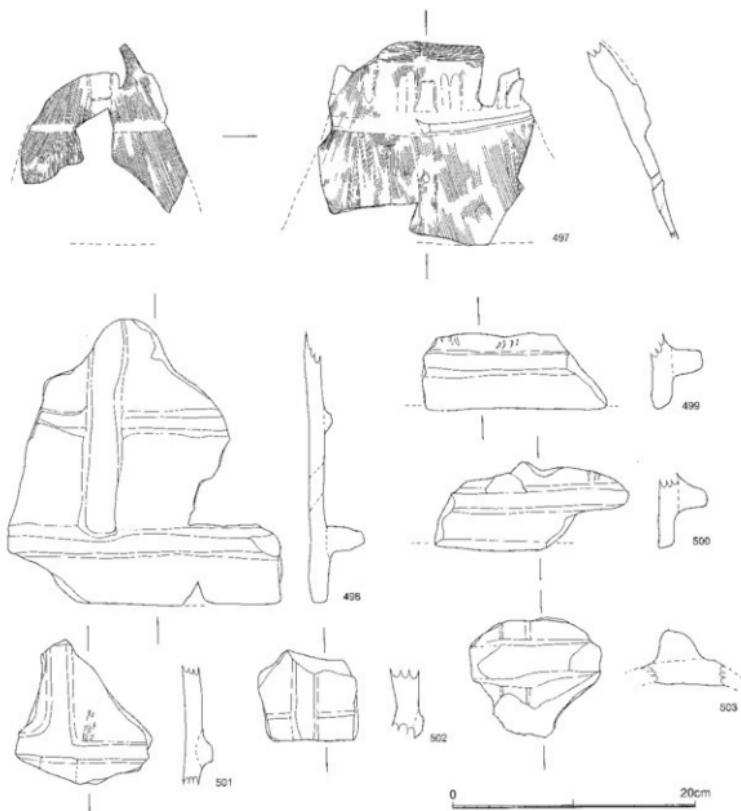


fig. 134 D地区出土家形埴輪実測図

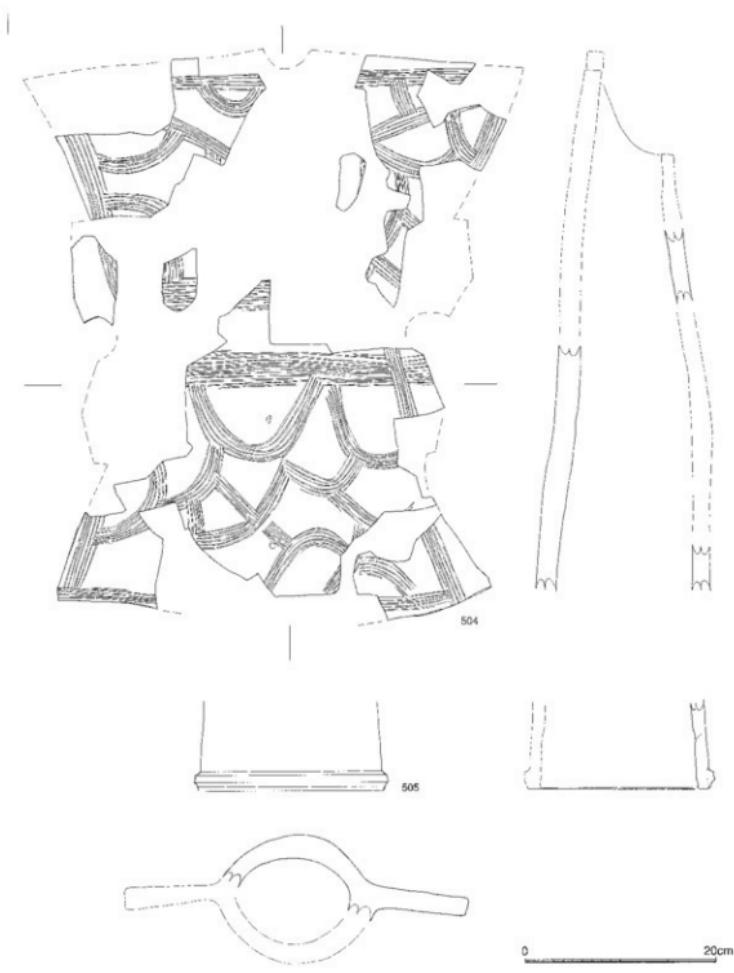


fig.135 D 地区出土着形埴輪実測図

盾形埴輪

いわゆる石見型盾形埴輪の破片が出土している。復元すると紋様構成が3帯分割となっているが、中央の分割帯に粘土紐は貼付されておらず、石見型盾形埴輪の型式分類からすると省略化が進んでいるタイプと考えられる。盾面は6条を1単位として沈線が施されているが、中央の横線だけは12条確認できる。穿孔は表側上方から裏面下方へ斜めに貫かれているが、貫通していない部分もある。淡黄橙色～淡灰色を呈し、胎土は良好で硬質なため、円筒埴輪とよく似ている。外面円筒部分についてはタテハケ調整であるが、輪の部分及び円筒との接合部分についてはヨコハケ・ナナメハケが確認できる。盾面と底部の間に何段存在するのかは判明する資料がないため不明である。

底部の破片である505は底面に突帯が貼りつけられるタイプであり、接合痕が外傾していることから倒立して成形していると考えられる。外面タテハケ、内面ナデによる調整が施されている。この底部が必ずしも504と接合するものとは言えないが、調整・色調・胎土共によく似ている。

明石川流域においては柿谷1号墳⁽³⁾、寺山古墳⁽⁴⁾において石見型盾形埴輪が出土しているが、古墳の時期はどちらも高津橋大塚遺跡より新しく位置付けられる。 (中居)

人物埴輪

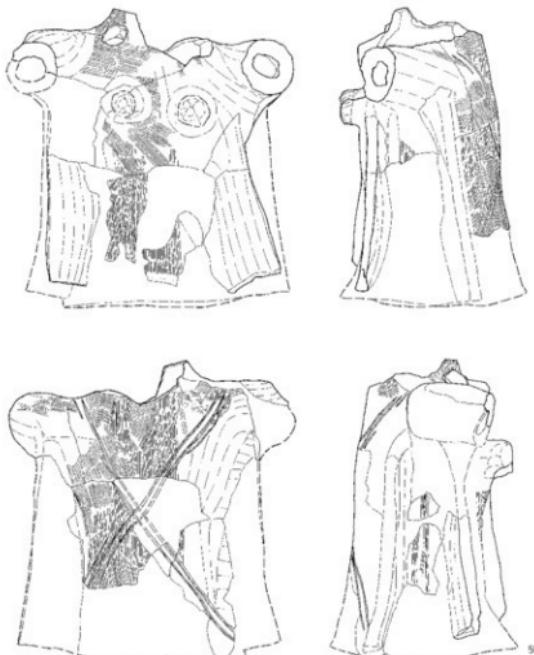


Fig.136 D地区出土人物埴輪実測図

人物埴輪
胎土は、わずかに砂粒を含み、焼成は須恵質で堅緻である。色調は赤褐色から灰色である。頸部から頭部と両腕、背面側のヒダなどが欠損している。多くの破片から復元されたものである。他にも人物埴輪の破片がある。

内面は指オサエやナデが見られる。外面は縦方向のハケを施しケサ状衣の衣紋を表す部分はナデ、前面の乳房の表現は指オサエとナデによって調整する。頸部には首飾りの玉と考えられる粘土塊が付いている。指オサエによって調整している。

また背面のタスキは、ヘラ描きで表す。ヘラ状工具で切り込みをいれるようにしており、比較的深く切り込んでいる部分もある。実測図右上から左下へのヘラ描きは部分的に3条である。実測図左上から右下へのものは2条で左肩下で一部描線が途切れる。右上から左下へのヘラ描きを先に行い、次に左上から右下へのものが後で描かれている。

ケサ状衣とタスキの表現から巫女を表現した埴輪と考えられる。神戸市内の巫女埴輪の出土例としては、住吉東古墳があり、また人物埴輪の出土例として住吉東古墳・柿谷1号墳・天王山3号墳・水谷大東古墳などがあげられる。

両腕で何かを捧げ持つ表現と女性としての表現、ケサ状衣とタスキの表現からこの人物埴輪は、巫女埴輪の可能性が高いものと考えられる⁽⁵⁾。 (口野)

(4) 小結

当初古墳としての調査を行っていたが、S D20の調査結果などから、墳丘状に観察された盛土は、近世以降の盛土であることが判明した。一般的には出土遺物と調査状況から付近に埴輪を持つ古墳が存在したと言えよう。しかしながら別の可能性として埴輪を用いた何らかの祭祀が行われた可能性も今後検討すべき課題と言えよう。

出土した埴輪は、土師質のものも見られるが、須恵質の埴輪が存在が顕著であることである。また出土した埴輪の中には窯内で爆ぜたと思われるものがある。須恵質の埴輪の出土も柿谷1号墳などを除き稀少例である。高津橋大塚遺跡周辺のみでなく神戸市周辺においても古墳時代の埴輪窯や須恵器兼用窯の発見例は無いに等しい状態である。

次に、石見型盾形埴輪⁽⁶⁾のもつ特殊性があげられる。盾そのものが持つ機能（敵からの防衛）と楠元論文にあるように石見型盾形埴輪「そのものに祭祀の要素が付託されていた」遺物としてとらえられる。その他の埴輪として円筒埴輪・人物（巫女）埴輪・家形埴輪が出土している。また須恵器では环身・环蓋・壺・壺などがあげられるが、その組み合わせが祭祀的遺跡として妥当なのか。出土位置がA地区やB・C地区の古墳と外界の境界を示し、防御のために置かれたものなのであろうか。周辺の出土例では柿谷1号墳のものがあげられるが、これは古墳の墳丘に樹立されていたものと考えられる。

いざれにせよ遺構そのものが失われ、遺物のみの出土であるため、埴輪による祭祀がおこなわれた遺跡なのか、単純に古墳が後世に破壊された結果であるのかは、結論を出すことは早急であるかもしれない。A・B・C地区の調査結果も踏まえて捉えるならば、古墳が後世に破壊された結果と考えておくこととする。

当章の最後に、今回報告の遺物などからみた古墳の築造順序を図式的に触れる。延命寺2号墳で出土した円筒埴輪は、川西編年のIV期⁽⁷⁾の特徴を備える。D地区の円筒埴輪は、V期の特徴を備えるようである。また延命寺古墳で表採された須恵器はT K10型式に相当する⁽⁸⁾。ただし表採資料であるため厳密な時期を示すものは明らかではない⁽⁹⁾。あえてこれらを順番に並べるならば、延命寺2号墳→延命寺古墳→D地区となる。これに加えるならば高津橋大塚古墳が延命寺2号墳の前にくる順序が与えられる。 (口野)

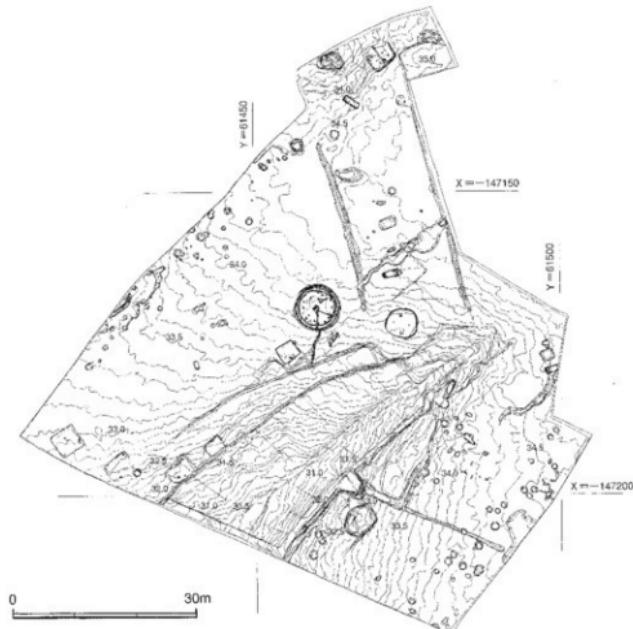
第2節 E 地区

(1)はじめに

E地区は、A～D地区の約50m北側にあたり、北東から南西へ傾斜する標高約34mから36mの丘陵上に立地する。調査区のほぼ中央に、浅い谷地形が認められる。平成7年度に、宅地造成予定箇所において試掘調査を実施した結果、古墳時代前期初頭の遺構・遺物が確認された。約5,400m³の調査区を設定し、平成8年4月8日から調査に着手した。

(2)調査の概要

調査区は谷地形を挟んで、東半部と西半部に分かれる。遺構面は著しく削平されており、谷部を除く地点では、耕土直下で地山面が検出された。包含層は存在せず、遺構の残存状況も良好とは言えない。遺構が確認されたのは、西半部に限られ、検出された遺構についても、僅かに痕跡を留めているに過ぎないものが含まれている。今回検出された遺構以外にも、掘削深度の浅い遺構が存在した可能性が高いと考えられる。東半部は、現代の耕作痕が確認されたのみで、遺構は確認できなかった。しかし、谷部の遺物出土分布から、本来東半部にも遺構が存在したと考えられる。耕作等による削平を免れた谷部からは、近世から現代に至る耕土層が数層存在し、谷が徐々に埋没した様子が窺える。



西半部の調査

耕土直下で検出された地山面からは、現代の耕作痕、土坑、掘立柱建物に伴う柱穴群と、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の整穴住居が8棟検出された。掘立柱建物は、柱痕の規模から、付近に現存する畜舎と同様の建物と考えられる。土坑は、最近まで樹木の育苗場として利用されていた際の、抜根に伴う痕跡であると考えられる。整穴住居のうち、全体のプランが確認できたのは4棟で、他の4棟は全て谷側の壁が失われている。床面のプランは、2棟が円形で、6棟が方形である。居住域として好条件と考えられる尾根線上では、遺構が検出されなかった。同時期の谷状地形との関連は不明であるが、人為的な掘削や土留等の痕跡は確認できなかった。谷状地形の利用は、自然堆積による地形の平坦化が進んだ近世以降にはじまり、耕作地として利用している。

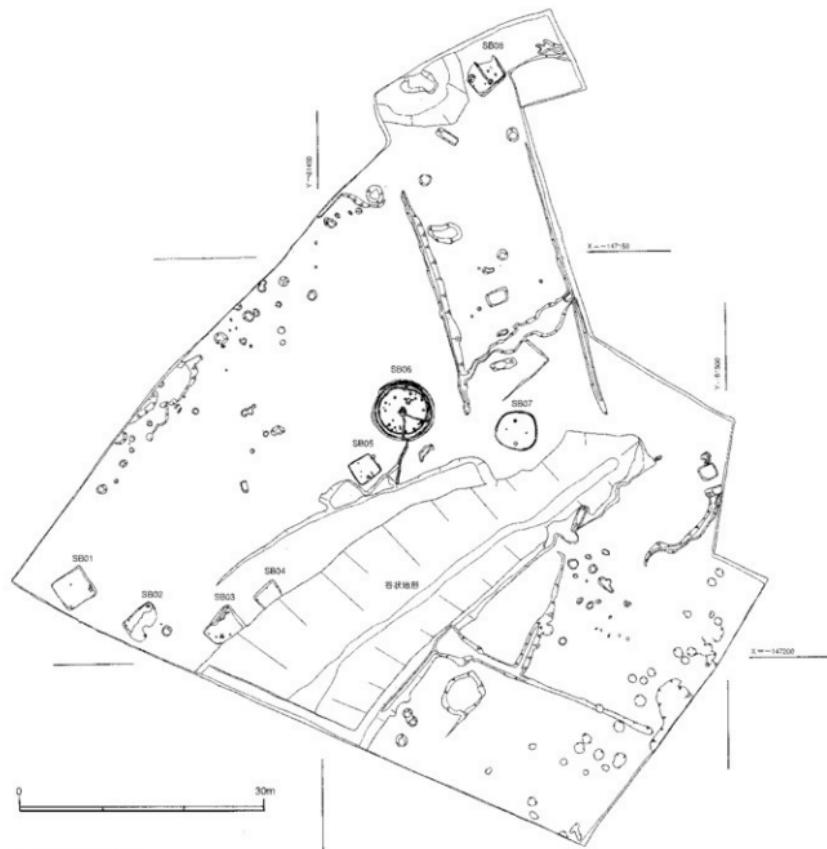


fig.138 調査区平面図

- S B01** 4.0m×4.4mの方形の堅穴住居である。床面直上まで削平されており、最も残存状況の良い尾根側の壁部で約10cm、谷側の壁部では、2~5cm程度の壁面の立ち上がりが残存していた。周壁溝は確認されなかった。柱穴は1基検出されたが、対応する柱穴は他に存在しない。尾根側の壁面及び床面の一部で、焼土と炭が検出されたことから、焼失住居である可能性が高い。出土遺物は細片が多く、時期を明確にしがたいが、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構であると考えられる。東コーナー部で上坑が1基検出されたが、用途は不明である。
- S B02** 4.6m×4.4m以上の方形の堅穴住居で、4本柱である。床面直上まで削平されており、壁面の立ち上がりは、尾根側の壁部で約10cm、谷側の壁部は不明瞭である。北端部で周壁溝の痕跡が確認できた。床面の一部から、焼土と炭が検出され、S B01と同様、焼失住居である可能性がある。出土遺物は極めて少なく、時期を明確にしがたいが、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構であると考えられる。
- S B03** 4.6m×3.0m以上の方形の遺構である。壁面の立ち上がりは、尾根側の壁部で約10cm残存していたが、谷側は削平されて残っていない。他の遺構が、地山面を削り出して整形しているのに対し、当遺構は砂礫による整地を行い、平坦面を形成している。柱穴は5基検出されたが、規則性は無い。弥生時代後期後半から古墳時代初期の遺物が少量出土したが、図化できたのは壺1点である。507は壺の胴部上半部から口縁部で、胴部外面はタテハケ、内面はヨコナデ仕上げる。
- S B04** 3.2m×2.0m以上の方形の遺構である。尾根側の壁部で約10cmの立ち上がりが残存していたが、谷側は削平されて残存しない。柱穴、中央土坑等の存在は確認されなかった。時期を特定できる遺物の出土はない。

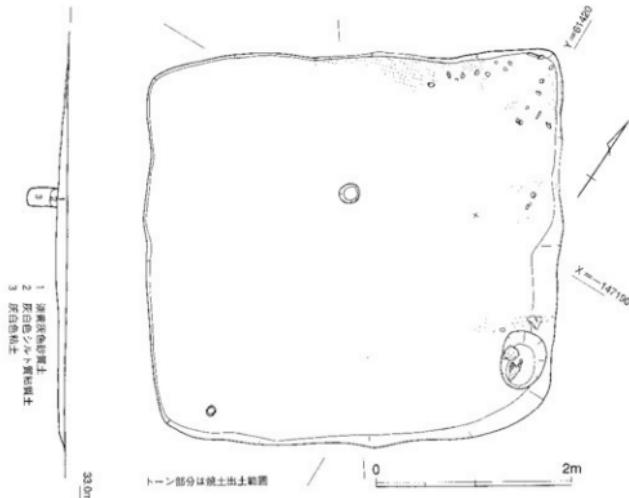


Fig.139 E地区 S B01平面・断面図

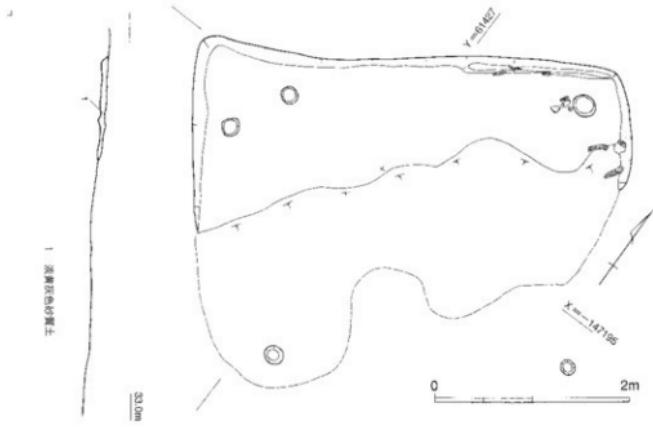


fig.140 E地区
S B02平面·断面图

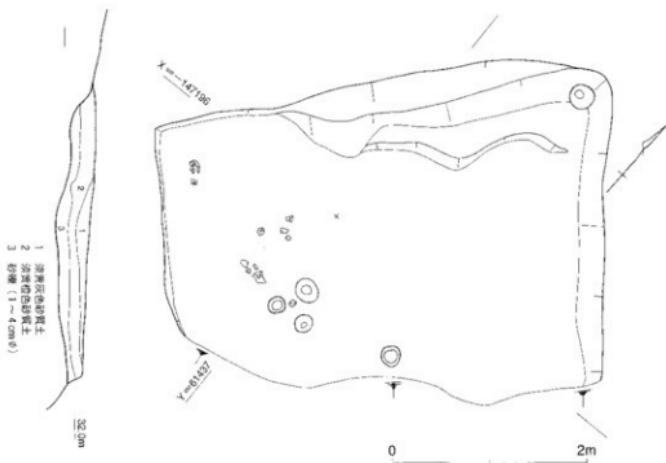


fig.141 E地区
S B03平面·断面图

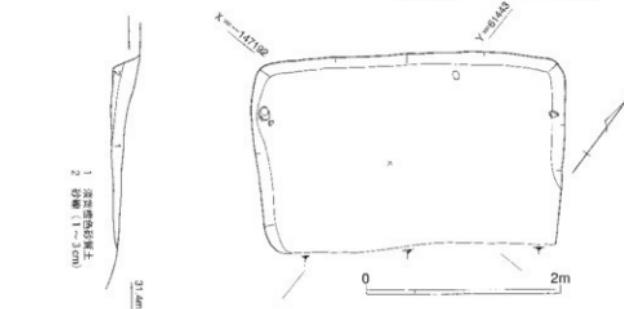


fig.142 E地区
S B04平面·断面图

S B 05

3.1m×3.3mの方形の竪穴住居である。今回の調査で検出された竪穴住居の中で、焼土及び炭化材の残存状況が最も良好であり、火災住居であると考えられる。樹種同定の結果、炭化材はクヌギ節及びクリであること、また、炭化材の上方から検出された屋根材は、イネ科の植物遺体であることが判明した。炭化材の検出方向は、斜面方向に平行するものが多く、棟方向は斜面方向と直行すると考えられる。柱穴は4基検出されたが、規則性はない。周壁溝は、谷側の一部を除きほぼ全周する。遺物量は少ないが、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺構である。

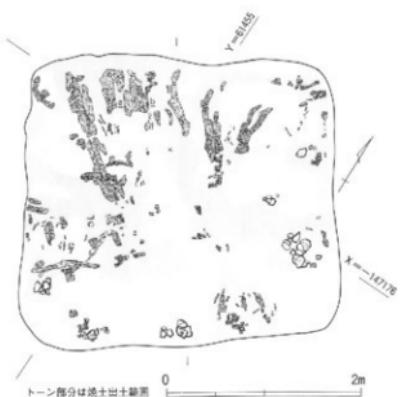
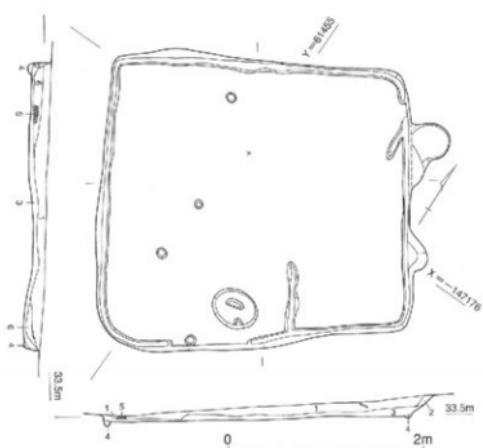


fig.143 E地区 S B 05炭化材・焼土出土状況平面図



写真21 E地区 S B 05屋根材・炭化材出土状況



1. 淡黄褐色砂質土 2. 淡黃白色砂質土 3. 黄灰色砂質土
4. 淡黄褐色砂質土 5. 炭化材 6. 黄褐色砂質土

fig.145 E地区 S B 05窓器状況平面・断面図

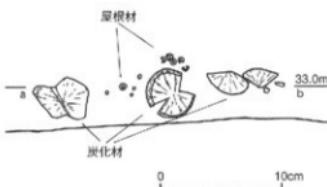


fig.144 E地区 S B 05屋根材・炭化材出土状況
断面図



写真22 E地区 S B 05屋根材・炭化材出土状況断面

S B06

拡張前

弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の堅穴住居で、規模を拡張している様子が窺える。

拡張前の平面プランは、直径約6.0mの円形で、7本柱と考えられる。周壁溝は全周する。確実に拡張前の住居に伴う遺物の出土ではなく、時期を特定できない。

拡張後

拡張後の住居は、直径約7.4mの円形に拡張されており、拡張前の周壁溝は埋められている。8基の主柱穴のうちの5基は、拡張前の周壁溝上に設けられている。周壁溝の北側部分は一部2重になっており、南側には、屋外に排水するための溝が設けられている。

中央土坑

長径120cm、短径105cm、深さ77cmの規模である。埋土からは、焼土と炭などが検出されたが、壁面に火熱を受けた痕跡はない。しかし、中央土坑に繋がる溝の壁面に、火熱を受けた痕跡が残る。幅10cm、深さ18cmの溝で、遺物は出土していない。排水を意図したものとは考え難い。屋内を区画するために設けられた遺構である可能性がある。

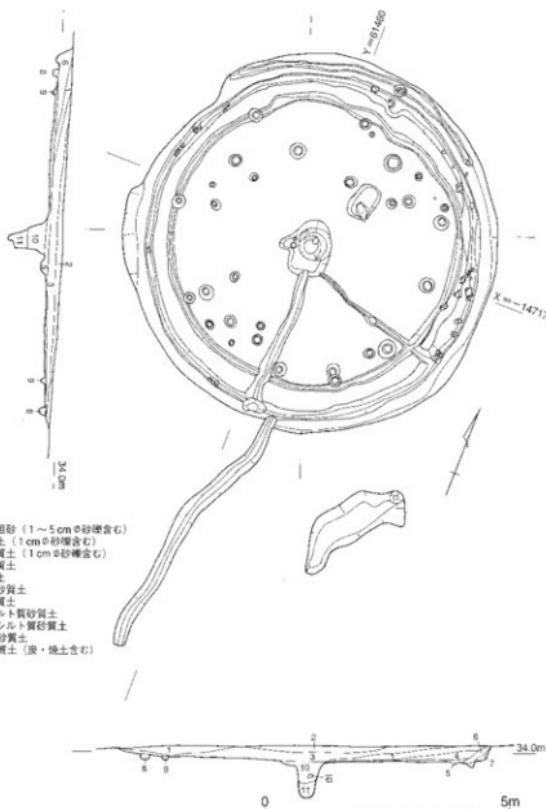


fig.146 E地区 S B06平面・断面図

出土遺物 508は球状の体部を持つ鉢である。口縁端部は水平方向に平坦面を持つ。器表面は失われており、調整は不明である。509は直線的に体部が立ち上がる小型の鉢である。内面は横方向のハケで仕上げる。510は浅い体部から上方に立ち上がり、口縁端部は内傾する鉢である。体部下半はヘラミガキ、上半は鋸齒文を巡らす。511は小型の壺で、外面はタタキ後ハケ、内面は板ナデで仕上げる。512は浅い环部から、強く外反する口縁部を持つ高杯である。内外面ともヘラミガキで仕上げる。513は外反する口縁端部を、強いヨコナデで仕上げる壺である。器表面は失われており、調整は不明である。514はほぼ直線的に延びる胴部下半部に、ヘラミガキで仕上げる体部が付く脚付壺である。脚部は、壺部を成形した後に接合している。515は強く外半する口縁部を持つ壺である。器表面は失われており、調整は不明である。516は長い頸部から、口縁が大きく外半する長頸壺である。口縁端部は下方に拡張し、擬円線と2対の円形浮文の痕跡が確認できる。器表は失われており、調整は不明である。517は球形の胴部に、直立する頸部が立ち上がり、口縁部は外反する壺である。内面下半はハケメ、上半はユビオサエ及びナデで仕上げる。

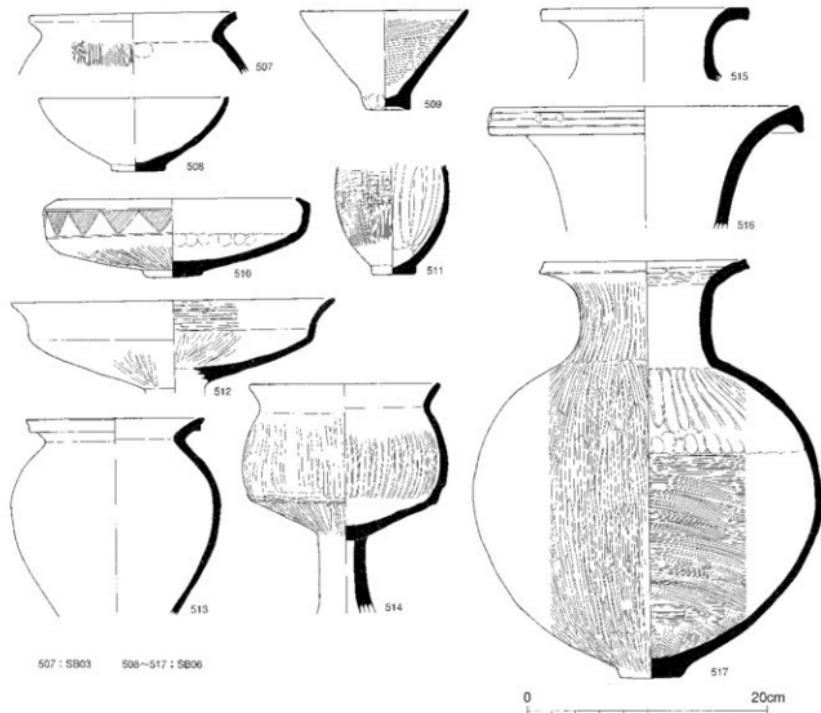


fig.147 E地区SB03·06出土遺物実測図

擦石

拡張後の周壁溝内から、硬質な石器が検出された。12片の破片を接合すると、全ての面は平滑で、赤色顔料が付着している。破断面を観察すると、表面から最大3mm幅で顔料が認められ、表面の微細なクラックから、顔料が染み込んだ痕跡と考えられる。また、打点を伴わない破断面が多く、被熱による膨張で破碎した可能性がある。このことから、顔料製作に関わる擦石に類する石器であったと考えられる。顔料の分析は未実施である。

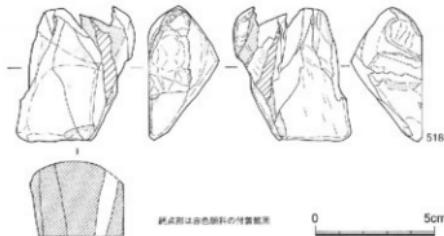


fig.148 E地区 S B06出土擦石実測図



挿写真17 E地区 S B06出土擦石

S B07

長径5.3m、短径4.8mの不定円形の堅穴住居で、4本柱である。壁面の立ち上がりは僅かで、南西部を除いて検出された周壁溝の痕跡によって、プランが確認できた。遺物の出土ではなく、時期を特定できない。

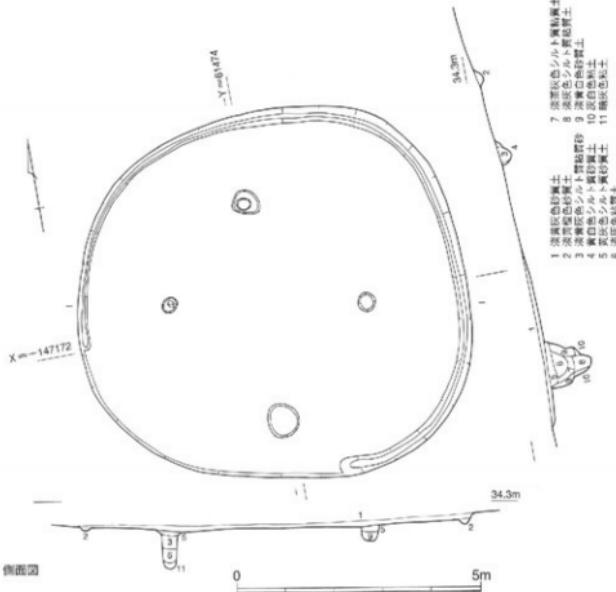


fig.149 E地区 S B07平面・側面図

4.4m×3.9mの方形の堅穴住居である。他の住居と異なり、北西方向に傾斜する緩斜面に立地する。尾根側の東壁部で、約20cmの壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側の壁は失われている。床面東側の一部に周壁溝が存在する。主柱穴と特定できる遺構は無く、構造は不明である。尾根側の壁際に、直径約65cmの土坑が存在し、焼土・炭が出土したが、遺構の壁面には加熱を受けた痕跡はない。床面のほぼ中央部に、北西方向に伸びる幅約20cm、深さ約10cmの溝が存在するが、用途は不明である。埋土より、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺物が、少量確認された。

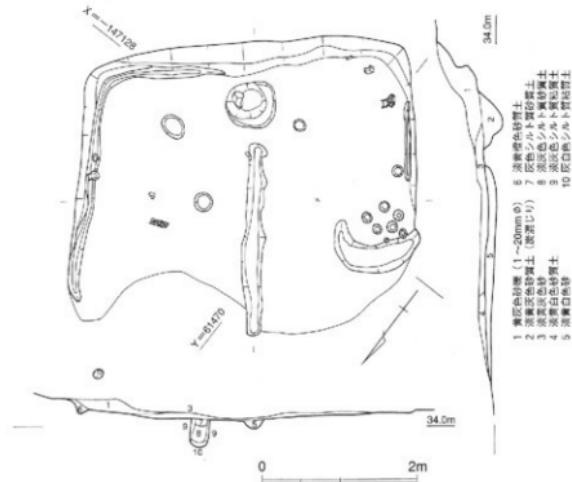


fig.150 E地区 S B 08平面・側面図

谷状地形

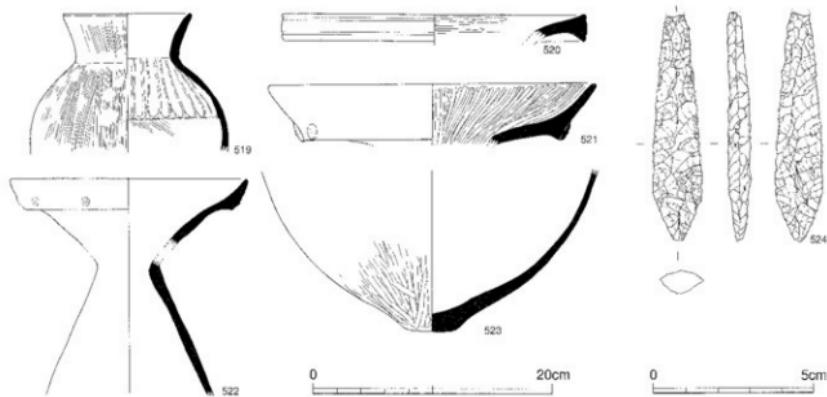
調査区のほぼ中央部で、北東方向から南西方向に緩やかに流下する谷状地形が検出された。調査区の北東部を一部拡張し、埋没前の谷部の起点部分を確認した。最大幅25m、最大深部210cmを測る。近世には、谷部がほぼ埋没し、現在の地形と同様の景観を呈していたと考えられ、それ以降は、耕作地として利用されている。それ以前に、人工的に地形を改変した痕跡はない。遺物の大半は、自然堆積層から出土しており、有茎尖頭器と弥生時代後期から古墳時代前期初頭の遺物が出土した。今回の調査区は谷部の起点に近いことから、堆積土は周辺の構成土に限られる。このことから、谷部から出土した遺物は、今回の調査区内に本来存在したと考えられる。また、谷部の東斜面側からも、遺物の出土が見られたことから、谷を挟んで、両側の緩斜面に遺構が存在した可能性が高いと考えられる。

写真24 E地区
谷部出土有茎尖頭器

S B08と
谷部の遺物

519はS B08の床面から出土した直口壺である。球形の体部に、直線的に伸びる口縁部が立ち上がる。外面はタテハケ、内面はユビナデで仕上げる。520は端部を2条の擬凹線で飾る、壺の口縁部である。外面の調整は不明であるが、内面は横向方向のミガキで仕上げる。521は二重口縁壺の口縁部である。口縁部外面に2対の円形浮文の痕跡が確認できる。内面は縱方向のヘラミガキで仕上げる。口縁部内面の段は不明瞭である。522は器台である。屈曲部から直線的に口縁部が立ち上がり、脚部も直線的に櫛が広がる。口縁部は円形浮文で飾る。器表は失われており、その他の調整は不明である。523は大型の壺の体部である。球形の体部を持ち、外面はヘラミガキで仕上げる。524はチャート製の有茎尖頭器である。先端を欠損している。残存長7.0cm、基部幅1.5cm、重さは7.8gである。両面共、左半は左下から右上へ、右半は右上から左下へ押圧剥離を加える。縄文時代草創期の遺物であると考えられる。

(山口)



519: SB08 520-524: 谷部

fig.151 E地区 S B08・谷部出土遺物実測図

(3) 高津橋大塚遺跡 E 地区の自然科学分析

高津橋大塚遺跡 E 地区SB05（竪穴住居跡）の構築材

植田弥生（バレオ・ラボ）

1. はじめに

当遺跡は神戸市西区玉津高津橋に所在し、明石川と天王川に挟まれた段丘状に立地する。E地区では弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が検出され、竪穴住居SB05には居住内全面に焼土と炭片が広がっていた。SB05は3.1m×3.3mの方形で周壁溝がほぼ全廻する竪穴住居で、炭化材は住居の中心部に長軸を向け放射状に検出された。ここではその住居構築材と屋根材の樹種同定結果を報告する。屋根材は炭化材の上面にワラ状のものがのっており藁葺を想定させる産状であった。このワラ状のものについても組織学的に検討した。

2. 方法

樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面（木口）は炭化材を手で割り新鮮な面を出し、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように削り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で観察・写真撮影をした。

ワラ状の試料は横断面を同様に処理して観察した。

3. 結果

同定結果を表にまとめ、産状図をfig.152に示す。

同定された分類群の組織記載

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus sect. Cerris* ブナ科 挿図写真19 1a.-1c. (サンプル5) 2. (サンプル7) 3. (サンプル7) 4. (サンプル22)

年輪の始めに大形の管孔が1～3層配列し除々に径を減じ、晩材部では小型・厚壁で孔口の丸い管孔が単独で放射方向に配列する環孔材である。年輪幅が広いと晩材部の管孔はやや火炎状になり实体顕微鏡ではコナラ節との見分けが難しくなる。接線状・網状の柔組織がある。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがある。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間でそのうちのクヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林に普通の高木でクヌギは二次林に多く、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重硬で割裂性がよい。現在では薪炭材として重要であるが建築材としは一般的ではない。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 挿図写真19 5a.-5c. (サンプル4) 6. (サンプル17)

年輪の始めに中型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。柔組織が接線状に配列し、集合放射組織はない。道管の壁孔は小形で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。縄文時代から果実は食用に、材は柱材の使用例が有名である。

草本性イネ科 Gramineae 挿図写真20 7. (サンプル8) 8. (サンプル8) 9a.-9b. (サンプル7) 10a.-10b. (R126)

どの試料もやや硬質で直徑が約0.5cmの程であり、稈の表面には細かい縦筋がある。節部には芽や分枝した痕跡はない。稈が葉鞘に包まれている試料もある(10a.)。横断面は維管束が散在する不整中心柱で、厚壁の纖維細胞からなる維管束鞘が維管束を取り囲む。中心部の維管束鞘は薄く、外側にある維管束鞘ほど厚くなり、表皮下では維管束が密に並ぶため維管束鞘は連続する。稈の表面の細かい縦筋は表皮下の小さな維管束と対応していることが判る。

タケ・ササ類は節に一筋のくぼみがあるが、当試料にはそのような筋はない。ヨシ属の稈は中空であり、表皮の内側には通気孔となる細胞間隙の穴が等間隔にあるが、当試料の表皮下にはヨシ属のような通気孔はない。当試料の組織と外部形態はススキ属に近い。ススキ属の稈は中心部まで柔細胞で埋まっており中空とはならない。当試料の中心部は空洞であるが、中心部のやわらかな組織が壊れたのか、もともと中空であったのか残念ながら確認できる試料は見あたらなかった(9a. 10a.)。従ってススキ属とは断定できない。この他にも稈が太くなるダンチク・マコモ・アイアシなどの大型のイネ科があるが、これらの組織に関する情報は今のところ不充分である。

4.まとめ

取り上げられ検討した炭化材26点の樹種は、23点がコナラ属クヌギ節で残り3点はクリであった。当遺跡の北方に位置する加東郡社町の下三草・諒訪ノ下遺跡の弥生時代後期の焼失家屋から出土した炭化材もほとんどがクヌギ節でありほかに少數のクリ・スギ・不明広葉樹が検出されており(山田、1993)当遺跡とほぼ同様な結果である。関東地方でもこの時期の住居建築材はクヌギ節が多く、それ以前の縄文時代ではクリが多かったがクヌギ節利用に変化したことが指摘されている(千野、1991)。近畿でも同様な傾向にあったのか、今後の資料の蓄積が待たれる。

当遺跡の炭化材のほとんどに中心部があり丸太材で使用されていたことが判る。R番号126はみかん割り状で使われていたらしい。クヌギ節もクリの材も直徑は2.5cm~5.0cmで6~10年輪あり、ほぼ同径で樹齢も揃っていた。R番号104サンプル4のクリは年輪が詰まったスカ目で19年輪ありほかの材よりかなり樹齢が多いが、直徑は4.0cmで太さはほかの材と変わらない。このようなことから直徑3.5cm前後で樹齢が6~10年生の丸太を選択的に使用していたと思われる。ただし炭化材は焼けると縮小するので実際はもう少し太かったであろう。

サンプル6・7・8からはクヌギ節の材の上面に直徑0.3~0.5cmのワラ状のイネ科の稈が出土している。同一方向に並び積み重なった状態もみられ屋根材と推測されている。外部形態と組織からこれらの試料は同一種のように見受けられた。タケ・ササ類やヨシ属ではないことは判別でき、ススキ属に近似するが、そのほかの大型となるイネ科との比較ができるおらず、ススキ属とは断定できなかった。

引用文献

- 山田昌久(1993)「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」242pp.
植生史研究特別第1号 植生史研究会
千野裕道(1991)「縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺体からの検討」東京都埋蔵文化財センター研究論集 X:215-249

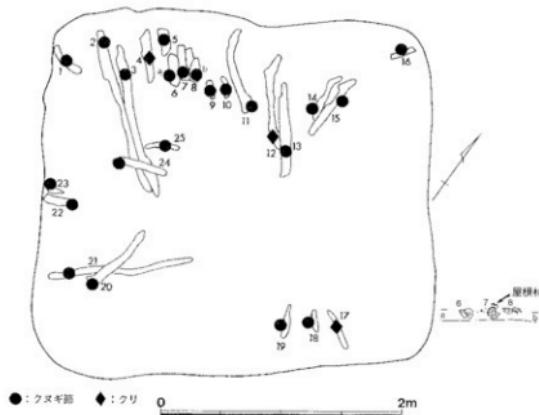
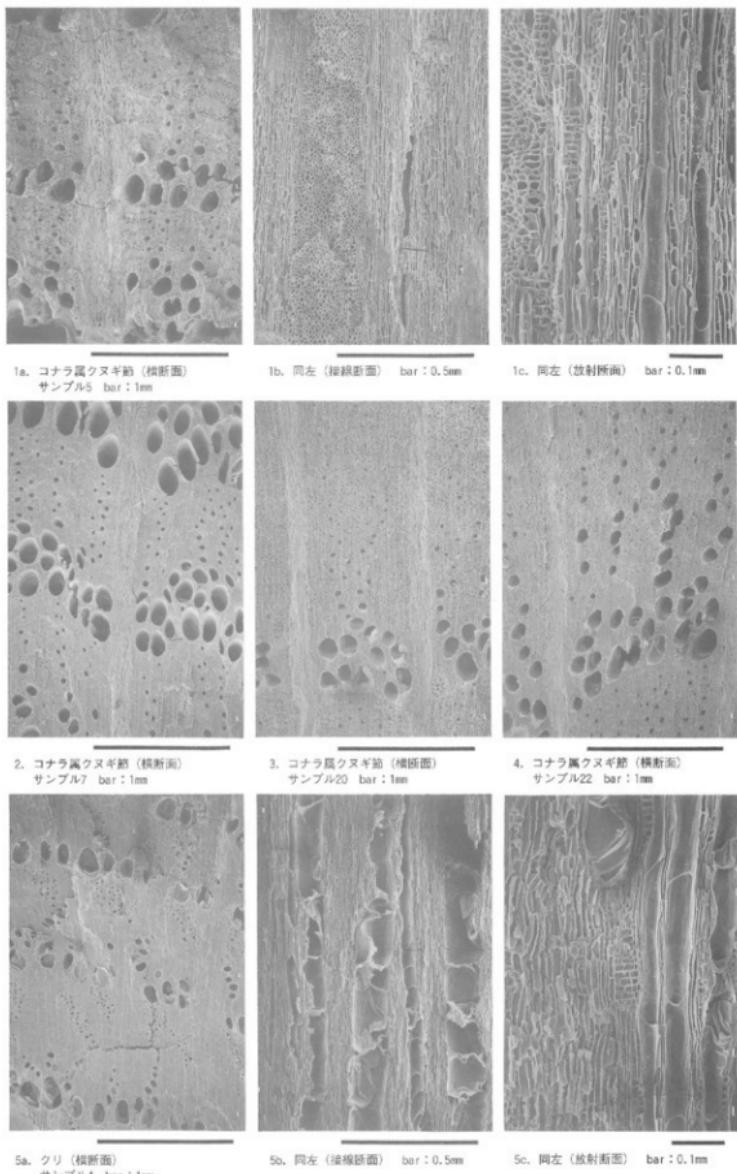


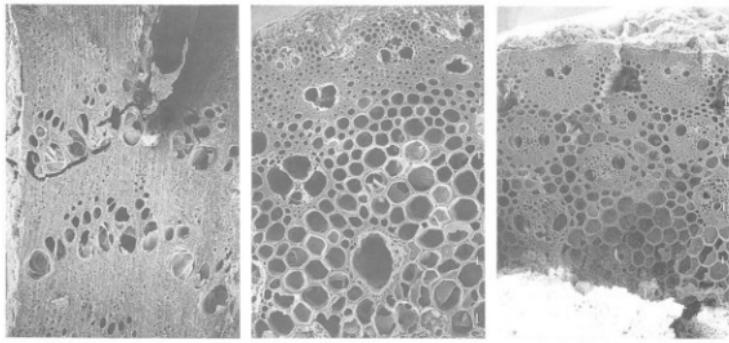
fig.152 E区S B 05出土炭化材の産状と樹種

R番号	サンプル	樹種	大きさ	年輪数	備考
101	1	クスギ節	Φ 3.0cm	9年輪	
102	2	クスギ節	Φ 5.0cm	10年輪	
103	3	クスギ節	—	—	
104	4	クリ	Φ 4.0cm	19年輪	
105	5	クスギ節	Φ 3.5cm	9年輪	
106	6	クスギ節	Φ 2.5cm	6年輪	
107	7	クスギ節	Φ 3.5cm	9年輪	屋根材
108	8	クスギ節	—	—	屋根材
		草本性イネ科	Φ 0.5cm±		屋根材
109	9	クスギ節	Φ 3.5cm	8年輪	
110	10	クスギ節	—	—	
111	11	クスギ節	—	—	
112	12	クリ	Φ 3.5cm	9年輪	
113	13	クスギ節	—	—	
114	14	クスギ節	Φ 4.0cm	10年輪	
115	15	クスギ節	Φ 4.0cm	8年輪+	
116	16	クスギ節	Φ 2.5cm	7年輪	
117	17	クリ	Φ 4.0cm	10年輪	
118	18	クスギ節	—	—	
119	19	クスギ節	—	—	
120	20	クスギ節	Φ 4.0cm	6年輪	
121	21	クスギ節	Φ 3.0cm	7年輪	
122	22	クスギ節	Φ 4.0cm	7年輪	
123	23	クスギ節	Φ 4.0cm	10年輪	
124	24	クスギ節	Φ 4.5cm	10年輪	
125	25	クスギ節	Φ 3.0cm	8年輪	
126		クスギ節 草本性イネ科	半径3.0cm Φ 0.5cm±	6年輪	屋根材・みかん割

表15 E地区 S B 0 5の構築材



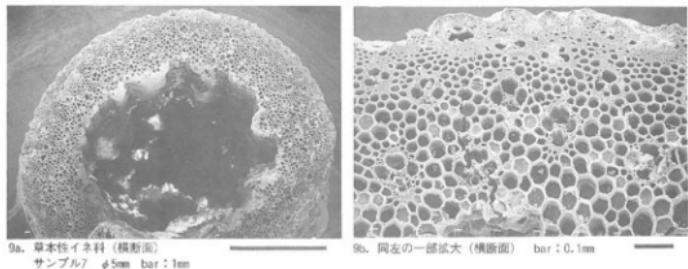
挿図写真25 E地区 S B05出土炭化材類微鏡写真(1)



6. クリ (横断面)
サンプル17 bar : 1mm

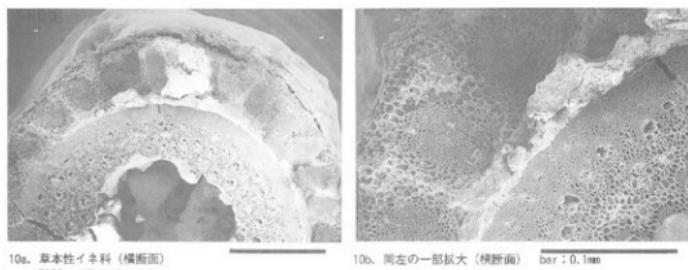
7. イネ科 (横断面)
サンプル8 ϕ 5mm bar : 0.1mm

8. イネ科 (横断面)
サンプル8 ϕ 3mm bar : 0.1mm



9a. 草本性イネ科 (横断面)
サンプル7 ϕ 5mm bar : 1mm

9b. 同左の一部拡大 (横断面) bar : 0.1mm



10a. 草本性イネ科 (横断面)
R126 ϕ 5mm bar : 1mm

10b. 同左の一部拡大 (横断面) bar : 0.1mm

挿図写真26 E 地区 S B 05出土炭化材顕微鏡写真(2)

(4) 小結

今回の調査では、8棟の住居と谷状地形が検出された。S B03とS B04は、住居と断定し難く、地山整形遺構と呼ぶべき遺構であるが、他の住居と、規模や立地に共通点が見られ、住居又は何らかの建物であると考えられる。また、時期については、遺構に伴って出土した遺物は少なく、各遺構の前後関係を明らかにし難い。しかしながら、出土遺物は、有茎尖頭器1点と陶磁器類を除くと、全調査区を含めても、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺物に限られている。この事から、これらの遺構は、ほぼ同時期に存在し、短期間營まれた集落に属する可能性が高い。

平野部の白水道跡で検出された遺構は、溝及び流路が大半で、それらの方向が伊川の流下方向と平行しており、堆積土からも、度々大規模な氾濫に襲われた事が窺える。居住域は池ノ尻地区付近に存在すると考えられるが、資料の制約により確定できない。西に隣接する、大規模な拠点集落である新方遺跡においても、当該期の集落は小規模で、明石川右岸の吉田南遺跡にその中心が移る。その要因は明らかではないが、明石川流域は、中期後半に大規模な洪水に見舞われており、その際、平野部の居住域の移動や再編が行われた事が想定される。また、高地性集落の大半が弥生時代中期後半に終焉を迎え、集落が拡散するなど、社会的な要因も重なっている事、丘陵上に形成した集落の中でも、玉津田中遺跡⁽¹⁰⁾など、古墳時代以降まで継続する集落と、当遺跡のように短い存続期間の集落が在する事など、明石川流域の当該期の複雑な集落動向を示している。高津橋大塚遺跡の集落が、短期で終焉を迎える理由は、近接する集落の動向が不明瞭であるため明確にしがたいが、この遺跡は当流域の遺跡立地の特徴を示す資料であると言えよう。

(山口)

註

- (1) 川西安幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第62巻第2号 1976
- (2) 三輪嘉六・宮本長二郎「家形はにわ」日本の美術348 1995
- (3) 「一市内の埴輪展－五色塚古墳整備完成10周年記念」神戸市教育委員会1985
『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市教育委員会1980
- (4) 「発掘された明石の歴史展－古墳時代の明石－」明石市教育委員会1995
- (5) 巾女埴輪については以下の論文等を参考にした。
原島礼一「生活の伝統と変化」31頁写真34 「庶民生活と貴族生活」日本生活文化史2 1974
(勢野茶臼山古墳の横穴式石室前部で庶民埴輪・家形埴輪・人形埴輪・円筒埴輪・巫女をあらわす人物埴輪が出土) 伊達宗泰「畿内の埴輪」「古代史叢捌」7 1974.
(たすきがけ製服衣をつける巫女) 群馬県大泉町出土。水野正好「埴輪芸能論」「古代の日本」2 1971
- (6) 石見型盾形埴輪については以下の論文等を参考にした。
吉田野ヶ「石見型盾形埴輪について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会編1992
楠元哲夫「大和における盾形埴輪の系譜」「岩峯池古墳 平等坊・岩峯遺跡」天理市埋蔵文化財調査報告書第2集1985
森 浩一「形象埴輪の出土状態の再検討」「古代学研究」29号1961
河内一浩「埴輪をめぐる製作集団の動向」「考古学論集3」1990
鎌方正樹「石見型埴輪の検討」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要」1991
- (7) 註(1)と同じ
- (8) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」1966. 田辺昭三「須恵器大成」1981
- (9) 鮎野 修氏の御教示による。
- (10) 多賀茂治「おわりに」「玉津田中遺跡 第6分冊」兵庫県教育委員会 1996

ま　と　め

1. 白水遺跡・高津橋大塚遺跡の時期

白水遺跡・高津橋大塚遺跡では、本報告以外の調査も含め、大きく分けて以下列記する時期の遺構・遺物がみつかっている。

I. 縄文時代草創期	有茎尖頭器（高津橋大塚遺跡）
II. 弥生時代中期	河道（白水遺跡）
III. 弥生時代後期後半～末	竪穴住居・土器館（白水遺跡・高津橋大塚遺跡）
IV. 古墳時代中期～後期	堅穴住居・掘立柱建物・祭祀造構・流路・溝（白水遺跡） 古墳4基（白水遺跡・高津橋大塚遺跡）
V. 古墳時代後期	水田（白水遺跡）
VI. 奈良時代後期 ～平安時代中期	梵鐘鑄造造構・掘立柱建物・溝（白水遺跡）
VII. 平安時代後期 ～鎌倉時代	掘立柱建物・木棺墓・溝（白水遺跡）

以下、弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代・平安時代後期～鎌倉時代について、それぞれの時期における白水遺跡・高津橋大塚遺跡の概観を述べる。 (安田)

2. 弥生時代

白水遺跡・高津橋大塚遺跡の弥生時代の遺構の分布は、平野部と丘陵部に2分される。

中期後半 平野部の白水遺跡では、弥生時代中期後半に集落の形成が始まる。造構は、北端地区で溝が1条検出されたに止まるが、近接した場所から、残存状況の良好な土器が出土しており、付近に当該時期の造構が存在すると考えられる。しかし、遺物は、造構内から出土したものを探ると、洪水による堆積層で形成されたベース層からの出土であることから、安定した生活面に伴う遺物とは言えない。北端地区は、北から伸びる尾根の高まりが僅かに残る地点に当たり、この微高地に当時の生活面が存在すると考えられるが、大きな広がりを持つ居住域の立地は考えがたい。

後期 中期から後期の過渡期の様相は不明であるが、後期後半には、平野部と丘陵部双方で集落の再形成が始まる。

平野部では、竪穴住居1棟・土器埋納造構1基が検出された池ノ尻地区と、不定形土坑群が検出された才神地区を中心とする生活域が想定される。しかし、近接する調査区では、安定したベース面が検出されず、他の調査区で検出された造構も、溝もしくは自然河道に限られる。池ノ尻地区と才神地区においても、造構密度は低い。以上の事から、中期後半同様、平野部に居住域を展開できるほど、地形的に安定した環境ではなかったと考えられる。比較的居住域として適していると考えられるのは、池ノ尻地区である。現在の集落が立地する、伊川右岸の自然堤防上に広がると考えられる。

一方、丘陵部の高津橋大塚遺跡E地区では、後期後半に新たな集落が形成され、8棟の竪穴住居が検出された。平野部の集落との関係は、資料的な制約により不明な点が多いが、出土遺物の帰属時期から、ほぼ同時期の集落であると考えられる。存続期間は短く、古墳

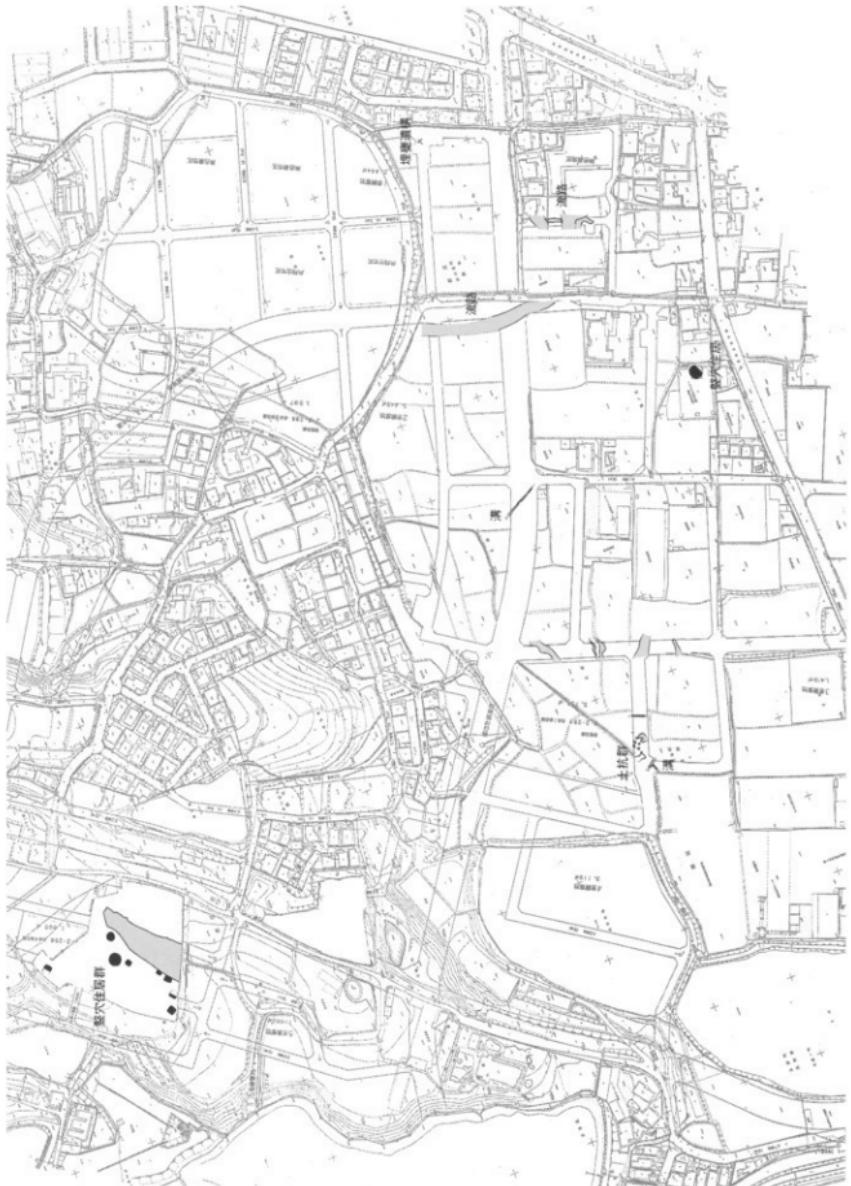


fig. 153 白水道跡・高津横大導溝跡の歴史時代の主な遺構 (S=1/3000)

時代初頭には終焉を迎える。

明石川流域では、弥生時代後期に集落の移動や再編が進み、新しい集落が出現する。その際、平野部に居住域を構える集落も存在するが、現在の集落立地と同様、一段高位に立地する集落が多い。その理由として、中期後半に経験した河川氾濫等の災害を避け、また、平野部を生産域として確保する意味からも、居住域をより高位に設定する必要が生じた事などが考えられる⁽¹⁾。しかし、同様の立地をしながら、存続期間が短い遺跡も存在し、高津橋大塚遺跡以外にも、池上口ノ池遺跡⁽²⁾、日輪寺遺跡⁽³⁾などが挙げられる。伐採、整地等の労力をかけて開発した居住域を、短期間で放棄する理由は不明であるが、居住域選択時のように、自然現象に起因する可能性はない。丘陵上に集落を開拓した理由と共に、集落の動向を考える上で好資料と言える。

(山口)

3. 古墳時代

集落

白水遺跡・高津橋大塚遺跡では、TK73型式に属すると思われる初期須恵器の器台片が遺跡の東部地区の第2次調査垣ノ内I地区⁽⁴⁾、及び第7次調査第1トレンチから数点出土している。このことから、白水遺跡内では5世紀前葉に古墳時代の集落形成が始まったと考えられる。

集落の最盛期はTK208型式からTK23型式にあたる5世紀中頃であり、この頃の堅穴住居が遺跡の中程から東にかけて、これまでに合計6棟検出されている。これらの堅穴住居は、ほぼまとまって造られており、その辺りが集落内の居住域と考えられる。また事業地の中央から東北部では同時期の掘立柱建物が合計8棟確認されている。これらの掘立柱建物は2間×2間のものが多く、この内東柱を持つものが4棟みられる。これらの掘立柱建物群は倉庫の可能性がある。

祭祀遺構

今回の調査地の東及び南東端では、滑石製品を多く含む祭祀関係の遺構が多く見つかった。その形状は浅い土坑ないしは浅い溝に土器が置かれていたものと、当時の生活面に直接土器を置いていたものがある。第3次調査第2トレンチS X01は前者に属するが、土器・鉢製品・滑石製品が当時の置かれた状態で確認され、祭祀の状態を復元する上で貴重な資料である。また、以前に滑石製品の入った壺が、道路工事中に今回の調査地よりも東の地点で確認されており⁽⁵⁾、祭祀関連遺構は今回の調査地よりもまだ東に広がると思われる。

これらの、祭祀遺構は居住域周縁の、溝や流路に伴ったり、伊川の後背湿地や氾濫原の付近で見つかっていることから、「水」に係わる祭祀と考えられる。

水田

調査地の西半では水田が確認されている。この水田は耕土層を覆っている洪水砂中からTK209型式の須恵器壺等が出土しており、古墳時代後期の終わりごろ（6世紀末）の水田と考えられる。その下層からもプランクトン・オバール分析より水田耕土層の可能性が高い層が確認されていることから、遺跡の西半は古墳時代後期以前から水田地であったと思われる。

古墳

集落域の北側にある段丘上には、数基の古墳が造られていたことがわかった。今回の調査では白水遺跡第6次調査延命寺地区II区から1基、高津大塚遺跡A・B・C地区から3基の計4基が確認された。延命寺1号墳⁽⁶⁾を含めると合計5基の古墳がこれまで段丘の縁辺

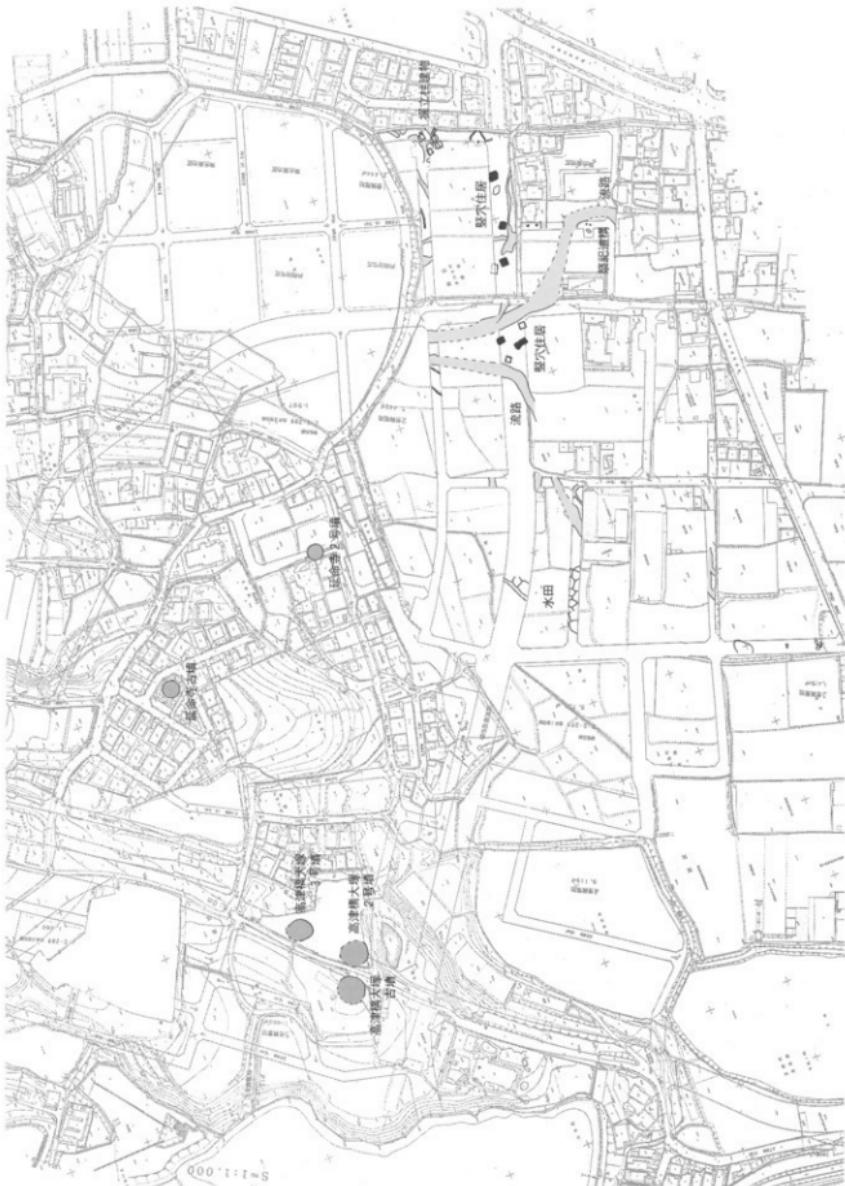


fig.154 白木油池・高砂橋・高砂大橋の古清時代の主な施設 (S=1/3000)

沿いで見つかっているが、これ以外にも既に消滅した古墳が数基存在したものと考えられる。このうち最初に造られたと考えられるのは高津大塚古墳で、その後延命寺2号墳（IV期の埴輪）、高津大塚2・3号墳（MT15型式～TK10型式およびV期の埴輪）、延命寺1号墳（TK10型式）⁽⁷⁾の順に造られたものと考えられる。この古墳群は、前記の集落域のすぐ背後の段丘縁辺に存在し、古墳群の築造開始時期と集落の形成開始時期がほぼ一致することから、この集落内における有力者層の墓域と考えられる。

以上のように、居住域・倉庫群・祭祀場・生産域（水田）・墓域と、集落内における空間配置を知ることができ、当時の集落景観をある程度復元できたことは今回の調査の大きな成果である。
(安田)

4. 奈良～平安時代

古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構は見つかっていないが、奈良時代の後半期より平安時代中期の遺構は白水遺跡内において見受けられる。

瓦

奈良時代後期から平安時代初期にかけては、第4次調査第7トレンチより古大内式軒丸瓦が⁽⁸⁾、また第2次調査北端Ⅰ地区において本町式軒平瓦が出土している⁽⁹⁾。同様の瓦が出土した付近の遺跡例としては、明石都衙ないしは明石駅家にも推定されている、明石市の太寺庵寺において古大内式⁽¹⁰⁾、同じく明石市天文町1丁目では本町式の軒平瓦が出土している⁽¹¹⁾。これらの瓦は播磨国府系瓦と呼ばれ、播磨国内の官衙関連の遺跡で多く出土する瓦である⁽¹²⁾。また、第4次調査第7トレンチではヘラ焼きの軒瓦が多数出土している。このような瓦は出土例が少ないが、白水遺跡のすぐ近くに所在する同じ伊川流域の寒風遺跡⁽¹³⁾と先述の太寺庵寺⁽¹⁴⁾でも出土しており、その関連性が注目される。

墨書き土器

また第2次調査北端Ⅱ地区で出土した奈良時代の須恵器壺には、「六口戸里家」の墨書きがある⁽¹⁵⁾。「里家」は平城宮下層出土の墨書き土器「五十戸家」⁽¹⁶⁾と同様に、公的な機関（＝郷衙か）を表すと考えられ⁽¹⁷⁾、また第6次調査北端地区では須恵器壺蓋の転用硯が出土していることや、先述の播磨国府系瓦の出土と考え合わせて、何らかの地方官衙が置かれていた可能性がある。

「延命寺」跡
関連遺構

平安時代中期では、第4次調査第7トレンチで検出された、神戸市内2例目の梵鐘铸造遺構が特筆される⁽¹⁸⁾。そのすぐ背後の段丘上には「延命寺」の字名が残っていることから、この「延命寺」に関連する遺構と考えられる。段丘上の第6次調査延命寺地区第Ⅱ区では寺跡に直接関連する遺構は確認されなかったが、朱墨の残った風字硯や灰釉陶器壺の転用硯が出土しており、また10世紀代の溝も確認されていることから、付近に「延命寺」跡が存在するものと思われる。ある程度の伽藍があったと考えると、その候補地としては、第6次調査延命寺地区第Ⅱ区西側の平坦地が想定される。梵鐘铸造遺構付近で出土した土器や瓦片等から、平安時代中期の10世紀後半から11世紀前半がこの寺院の最盛期と考えられる。

集落

平安時代中期の集落は沖積地の調査区より検出されている。第3次調査第3・4トレンチや、第5次調査で掘立柱建物が検出されており、遺跡の中央部に数棟の建物があったものと考えられる。建物に付随する溝等から出土した遺物より、これらの建物も梵鐘遺構と



fig.155 白水運河・高津大運河の系魚、平安時代の主な運河 (S=1/3000)

ほぼ同時期の10世紀後半から11世紀前半と考えられ、「延命寺」の最盛期の時期と重なる。またこの時期以降には継続して集落が営まれないことから、「延命寺」に関連する建物の可能性もある。

(安田)

5. 平安時代後期～鎌倉時代

集落

12世紀から13世紀にかけては遺跡内のほぼ全域において掘立柱建物が見つかっている。見つかった掘立柱建物は1か所には集中しておらず、遺跡全体に散在的に建てられている。しかし、掘立柱建物が建てられる場所においては、第2次調査塙ノ内Ⅰ地区⁽¹⁹⁾・同じく北端Ⅲ地区⁽²⁰⁾・第3次調査第3トレンチ・第6次調査北端地区等で見られるように、何度も建て替えを行っている例が多くあり、屋敷はさほど移動せず、決まった屋敷地において定住していたものと考えられる。

墓

当時の墓跡は、同時期の他遺跡では多く見れる屋敷内あるいは屋敷に隣接して造られたいわゆる「屋敷墓」は見つかっておらず、第2次調査塙ノ内Ⅱ地区において掘立柱建物から離れた場所で、小型の木棺墓が1基見つかっているのみである⁽²¹⁾。

条里

建物の方向は、この時期より明石郡条里の方向に一致する傾向が見られる。特に沖積地で見つかっている掘立柱建物にはその傾向は顕著である。段丘上の第6次調査延命寺地区Ⅱ区で見つかった掘立柱建物は明石郡条里の方向とは合わず、条里線の施工は段丘の上までは及んでいなかったと思われる。

明石郡条里方向に沿った遺構は、第2次調査池ノ尻Ⅰ地区溝S D01や⁽²²⁾、第7次調査水田遺構でも見られ、これより以前の時期で現況条里遺構の方向に沿う遺構は見られないことから、12世紀前後の時期に明石郡条里が施された可能性が高い。また、その水田の形状は第7次調査で検出された水田畔でみると、水田1町内においても、より小区画に分割されていたことが判る。

「伊川谷庄」

神戸市伊川谷町白水付近は、平安時代後期、12世紀前半の保延3(1137)年には、岡衙領の「明石郷」であった。その後、12世紀後半の寿永2(1183)年までには「伊川谷庄」として立荘している⁽²³⁾。つまり12世紀の中頃前後の「伊川谷庄」として荘園が成立した時期と、現地表面で確認できる条里方向と一致する遺構が出てくる時期が、ほぼ一致することから、白水付近における条里遺構の成立は、12世紀の荘園成立に伴うものの可能性が考えられる。

しかし、白水遺跡内においては、玉津田中遺跡⁽²⁴⁾や二ツ屋遺跡⁽²⁵⁾で見つかっているような、荘園管理者層の居館はこれまでの調査ではみつかっておらず、先記の掘立柱建物は荘園内における中小農民層の住居と考えられる。

以上のように、中世前期の遺構は、沖積地全体に広がる水田城と、その中に散在的に存在する掘立柱建物を中心とする屋敷地がみつかっており、当時の村落景観は散村的な風景であったと思われる。

(安田)



fig. 156 白水道路・高津原大塚跡の平安時代～鎌倉時代の主な道路 (S = 1/3000)